

「ピリオドを打つ、そして」

マタイによる福音書1章1-17節

- 1、権威づけとしての系図。桓武天皇に遡る庶民の家柄の系図。マタイは一方で系図の権威づけを尊重する。だが、そこへの批判的一面もある。系図の中にタマル(3)、ラハブ(5)、ルツ(5)、ウリヤの妻(6)を入れる。異邦人の四人の女性、ダビデの罪の事跡が神の救済の抱擁の大きさを示す。
- 2、長々と続く一つ一つの名前には旧約聖書の歴史的物語がある。延々と続く人間の生きる営みを記してきたアブラハムからヨセフにいたる「血のつながり」は、ヨセフで途絶える。イエスは「聖霊によって」誕生している。(このくだりについては、イエスはマリヤとローマ兵との子供であったなどと憶測する説すらある)「血のつながり」は人間にとって宿命的直接性であり、「血のつながり」は絶えず、傍流を排除する。例えば、創世記のアブラハムには子がなかった。側妻のハガルに子イシュマエルを儲けた。血統への思惑である。しかし、後、正妻のサラから(神の計らいにより)イサクが生まれる。「兄弟は他人の始まり」というが、イシュマエルは追放され、イサクが正統の家柄を継ぐ。系図は人間の横関係(社会)を作らない。その系図が、ヨセフでぶつ切り切れる(16)。マタイはそれを18節の「処女降誕」物語につなげる。マタイの系図の神学的、信仰的意図は、人間の伝統・歴史は器として、枠組みとして尊重されねばならないが、それへの持たれかかりが断ち切れ、初めて神と出会うのだと。「断ち切る」ある意味では「ピリオドを打つ」こと。そこには非連続の連続という歴史の中に働かれる神の姿を見る。パウロの言葉を援用すれば「肉と血とは神の国を受け継ぐことはできず」(コリⅡ15:50)となる。
- 3、最近のマタイ研究では、マタイは原始キリスト教の伝承の力点を少し変えたという。「ダビデ王の家系にメシヤが生まれる」というユダヤ教の主張をイエスのメシヤ性の証明に使った系図を、アブラハムにまで遡らせて、イスラエル史全体が神の導きにある、としたのはマタイであるという指摘である。「ダビデによるイエスの証明」という固定観念を破り転換させ、歴史における神の働きへの、新しい視点を強調する。。固定的観念に終止符(ピリオド)を打って、そこから自分が生きる現実への枠の組直しをしているのがマタイだという。
- 4、マタイは旧約の伝統を大切にした福音書である。その伝統を受け取り直してゆくところに伝統の「成就者イエス」を見ている。自分がいつの間にか縛られている固定観念、固定的世界観、固定的価値観、したり顔の常識、社会的しがらみの知識、視野の狭さをにもピリオドを打つ知恵を、「血のつながり」の相対化にさらに加えてゆく勇気を与えられて、新しい年を生きたいと思う。
- 5、最後に天野忠さんの「新年の声」という詩を記します。

「これでまゝ／七十年生きてきたわけやけど／ほんまに／生きたちゅ正身のところは十年ぐらうなもんやろか／いゃあ・・・／とてもそんなにないやろなあ／七年ぐらいもんやろか・・・／3年・・・／底の底の方で／正身が呻いた／――そんなに削るな」。削り切れない正身を「恵み」として大事にし新しい年を歩みたい。

「見失って、見つける」

ルカによる福音書2章41-52節

- 1、新約聖書の4つの福音書で、イエスの幼少時代の記述を比べてみると、マルコ、ヨハネは全く興味を持っていない。マタイはヘロデの幼児虐殺と「聖家族」のエジプト逃避行・帰還についてのみ記す(マタイ2:13-23)。ルカはイエスの成長の話を記す。それが「神殿で捧げられる、ナザレに帰る」(2:22-40)の話と今日のテキスト「神殿での少年イエス」の話である。2ヵ所出てくる「たくましく育ち」「知恵が増し」(40, 52)は旧約のサムエル記上2:26が下敷きになっている。新約外典「トマスによるイエスの幼児物語」は幼児イエスの奇跡物語が記され、「神童物語」や「聖者伝説」になってる。ルカのみ12歳の過越祭への参加の物語を記す。しかし、歴史記述というよりは、ルカの神学的構成と信仰教化の意味が隠されている。
- 2、①41-45 節。両親がイエスを見失ったこと。この福音書の24章「(女たちは)中に入ってもイエスの遺体が見当たらなかった。そのため途方にくれていると、」(3-4)。これはイエスを探す両親に重なる。人はイエスを見失うことにおいてイエスに出会う。人間の直接性は、神に向かう時、断ち切られる、との暗示がある。神学的には「十字架の贖きなくして復活の命への繋がりはなし」ということか。
②46-47 節。「三日の後・・・見つけた」。エマオの途上の弟子は「このことが起こってから三日目なのです」(24:19-21)と語る。「三日目、三日後」はイエスの復活を証言する術語である。ここにはイエスの見つけ方への示唆がある。③48-50 節。両親の驚きは神殿の中にイエスを見つけたことだ。イエスはけろりとして「わたしが自分の父の家にいるのはあたりまえだ」という。ヨセフとマルヤが両親であることは否定されていない。それでいて「父」とは何か。一元的に両親と別な「父」なる支配原理があるのではない。「肉」「血」「民族」の結束原理、支配原理の相対化が示唆されている。「両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。」(50)。これはユーモアに近い。恐らく、我々も同じくであろうから。④51節。「ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」。「仕える」(ヒュボタッソー)。実は、この語は新約38例中、能動は「服従させる、従属、屈伏させる」、受動は「従属させられる」という意味で、古代世界の社会構造を反映している語で、あまりいい意味ではない。「中動」で用いられると「従順である」の意味(この箇所他、Ⅰコリ15:28b, ヘブ12:9, ヤコ4:7, ロマ8:7, 10:3, エフェ5:24a)。マリヤが「すべて心に納めていた」とは、急いで結論を出してしまわないで、暖めていたということか。ある観念、確信、固定的思想を持つのはやさしい。だが思想しつつ、というプロセスを大事にしたい。⑤52節。知性、体力、そして「神と人ともに愛される」とは、精神性、霊性、関係性の豊かさの表現であろう。
- 3、失って、見つける、とは神学的、信仰的には、「十字架と復活」の二重性、両義性、を表している。ルカの神学の一面であろう。だが、少年イエスの話にこれを盛り込んだルカの文学性を大事にしたい。失い、探し、悩み、模索し、それでいて、大工の子少年イエスの日常を想像して、ユーモアのある生き方をしたい。

「哀しみを通して成就する救い」

マタイによる福音書2章13-21節

- 1、今日の聖書箇所は「ヘロデの幼児虐殺」のお話です。イエス一家はエジプトへ難を避けて逃れます。系図では、「聖霊によるイエスの誕生」で「マリヤの許婚者」という脇役だったヨセフがエジプト逃避行とナザレへの帰還では主役です。「子供とその母親」という表現に、母子を守る頼もしさが滲んでいます。
- 2、注意深くこの箇所を読むと、この短い箇所に旧約の引用が四か所もあります。「ヘロデが死ぬまで」(15 [ソロモンが] 王上11:40)。「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」(15, ホセア11:1)。「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き」(18, エレミヤ31:15)。「この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」(20, 出エジ4:19)。ここにはイスラエルの歴史のエジプトでの奴隷、アッシリア帝国とバビロニア帝国の侵略、虐殺、捕囚、が重ねられています。哀しみの追体験です。「救い」はその哀しみを通してこそ実現しているのだ、というメッセージがあります。この箇所の、キーワード(鍵語)は「実現(成就)するため」(15, 17, 23)です。三ヶ所も出てきます。ヘロデの虐殺は、アッシリアの虐殺に重ねられます。その虐殺を「哀しみの母親ラケル」が草葉の陰で泣いているという古事が引用されます。哀しい出来事です。だが、その歴史の中に「救い」が実現してゆく。マタイ福音書の信仰です。その救いは、十字架の苦難をかいくぐって実現するのだ、という伏線が言い表されています。
- 3、現代史の中の「虐殺」の歴史を私たちは、想像をします。しかし、虐殺の現場にいなかった私たちはその実像を知りません。歴史記録、証言記録、芸術作品、などはそれに迫って伝承を伝えています。アウシュヴィッツ、南京、沖縄、カンボジア、ベトナム、イラク、パレスチナなど。これらの現代史の細部には、きっとエジプト逃避行を思わせる出来事があったに違いありません。現代史の微かな灯になっています。そこを生き延びた人達は、現代史の最も暗い部分を自分のこととして負って生きているのではないのでしょうか。渡辺義治さん、横井量子さん夫妻(ノンフィクション・ステージ地獄のDECEMBER—哀しみの南京—[この間横浜であったこの演劇のピラを受付に置いておきますのでご覧ください])などもそれぞれ負われて生きている方たちです。
- 4、「彼はナザレ人と呼ばれた」の引用は旧約のどこかはっきりしません。イザヤ11:1「若枝(ネセル)」または、イザヤ42:6「ナサル(見守る人)」に結び付ける人があります。最近の研究家は「ナザライオス(ナザレの人)」を「ナジル」に結び付けて「聖なる人」と理解します。ナジル人のお話は旧約のサムソンが有名です。苦難をかい潜って「聖なる者」すなわち「救い主」とされたいという意味でしょうか。もちろんナザレは地名で、イエスがそこで育った地ですが、ベツレヘム伝承から、ナザレへの移行を意義付けたものだといわれます。
- 5、私たちは「哀しみの現実」の先が、イエスの灯に繋がっている事を心に留めて日々を歩みたいと思います。

「福音とは、即イエス」

マルコによる福音書1章9節－15節

1、「福音」(ふくいん)は「よい知らせ」という意味です。古代オリエント諸国では王の誕生、即位などを喜ぶ時に用いられました。現代でも新しい医療の開発など、患者への福音だ、と用いられます。初代教会はこれをキリスト教用語とする事で、皇帝礼拝とは別な価値観を宣言いたしました。初代教会は「福音」をどのように捉えていたのでしょうか。パウロは、すでに当時の教会の人々が知っている「福音」の再確認をしています。「すなわち、キリストが聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、・・・また三日目に復活したこと」(コリ1、15:3-4)。「この福音は、・・・御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです」(ローマ1:3 以下)と表現され、また「律法」と「福音」との対比という展開もされています。ここは聖書(とくにローマ3章以下)を少し学んでいただくと「福音」の理解が深まります。

2、さて、日本では、1970年以降、「福音派」とか「社会派」などという使い方が流行しました。どう考えても「レッテルはり」なのですが、福音理解を「キリストの十字架は人間の罪の贖い」という贖罪論に集中させていくのが前者、福音による生を愛の実践・社会での共生まで含めて考えるのが後者、という事になっています。今もってその亀裂は癒し難く存在しています。

3、マルコ福音書の「福音」の捉えかたは、初期教会のように「福音とは・・・」と文言でまとめる(packaged message)信条化の方向にではなく、イエスという方との出会いの諸出来事そのものののだ(matter of encounter)という方向にもって行きました。それがイエスとの出会いを語る「福音書文学」という形式です。「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」(1:1)という語り口で始めて16章にいたるのです。だから、そこには「わたしは、こうイエスにであった」という個別な「奇跡物語」が沢山収録されています。当時の人々が交わらなかった被差別者、障害者、子供などとイエスは交わった物語、当時権力の座にあった、律法学者らとの喧嘩も収録されています。イエスの言説もその聴衆や光景と一緒に語られています。

4・マルコでは「福音」と「イエス」が並置されています。「わたしのためまた福音のために」(8:35, 10:29)という表現です。ここには「福音」はまとめられないイエスの生涯と振る舞いのすべての出来事なのだという主張があります。まとめるということは大事です。でも、まとめられないということも大事です。後者を主張するのがマルコです。よく話題になるエピソードをまた繰替えるのですが、J.D.ディヴィス宣教師(1838-1910 同志社教授)の遺言が「My Life is My Message」であったことは有名な話です。かれの生涯すべてが、まとめられない遺言なのです。私たちにとっても、イエスに従う決断をして、イエスの後に従い、イエスを見失い、イエスを裏切り、イエスに叱責され、イエスに驚き生きるすべてが「福音」なのではないでしょうか。

「魂としての人間」

マタイによる福音書10章26節—31節

- 1、「体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」(マタイ10:8)は諺のように、当時の教会で用いられていた。迫害の状況の中で、伝道者が殉教をも恐れずに一層伝道に励むようにとの勧めである。事実マタイの32節、40節では迫害の状況が語られている。研究者はマタイとルカに並行するイエスの言葉から『イエス語録集』(学名でQ[quelle 独])を想定する。それによればこの言葉は必ずしも迫害の状況だけではなく、もっと一般的に人間への理解のために言われたかもしれない。マタイもルカも「魂」(プシュケー)は①自然的生命、②感情、愛情などの起こるところ、③自由に決断する主体としての人間自身。関係存在としての人間。などの意味を含む。③は創世記2章7節の、土の塵である人が神の息により生ける存在になったという神学的同察を含む。マタイもこの意味を含めて用いている。
- 2、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」(ローマの詩人ユベナリスの言葉)は人間のバランスから、二分法で人間をみる。だが、パウロは人間を「霊と心と体」(第一テサロニケ5:23)と三分法で考えている。現代でもYMCAは三角形の標識を用いて「Mind(心) Spirit(霊) Body(体)」で人間をあらわす。霊とは何か。フランス文学者の田辺保氏はこのパウロの霊を「エスプリ」という語で語り、「そこから、ふと、より高次の意外な『何か』を暗示しうるセンスだといえは幾分近いのではないだろうか」といっている。『何か』を「神」と言ってしまうがそれまでだが、単に人間の側の心や精神の豊かさと言ってしまわないで、関係を察知するセンスだと言ふところにふくみがある。「霊」は神学的に表現すれば「神から賜う関係(聖霊)」であることに違いはない。ここはしかと押さえておかねばならない。だが、しかしそれを感知する人間のセンスの問題にまで引き寄せてい「霊」を考えると文学者らしさがある。「魂」はそのセンスを宿した人間を現わしている。そのセンスが人間と人間とを結びつけるとき、「心」や「体」の違いにも関わらず、「霊」によって結ばれた関係が生まれ「交わり」が生じる。霊は聖書では風とも訳されている。(ヨハネ3:8)。風を感じる感性を含めて、自由をまとう魂としての人間への自覚を促す。
- 3、土井敏邦監督の作品映画『沈黙を破る』を見た(日本キリスト教婦人矯風会主催)。パレスチナ占領の残虐を兵役で体験したイスラエルの青年たちが「沈黙を破る」というNGOを立ちあげて、政府の弾圧にも屈せずヘブロンでの残虐の事実を示す写真展を開き、占領の現実とイスラエルの廃頽を含めての悲惨を語る。それは単なる「反戦」の運動ではない。半世紀を超えて苦難を受けてきたパレスチナ人の魂にも触れる。過去の戦争加害責任を忘却し、かつパレスチナへの加害責任をも自覚しない日本人の心にも触れあう。監督は17年かけてこの映画をつくった。魂が人間をつなぐ。

ルカ福音書11章5節—9節

- 1、まず、聖書のルカ11章を開けて下さい。「祈るときには」という見出しがついています。この箇所は、著者ルカが、自分の教会の読者に「祈り」のことを教えている箇所です。
- 2、ルカは二つの事を取り上げています。①「熱心に祈れ」という事。「人間の側からの神様への関係」。②「天の父は求めるものに、聖霊を与えて下さる」(13節)ということ。「聖霊」という難しい言葉に戸惑う方は、「神様からの人間への関係」と一応理解しておいて下さい。ルカは両方とも大切だと言っています。10節では「だれでも、求めるものは受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」と人間の側の、努力、熱心さ、の大事なことを。11節と12節では、「魚を求める自分の子供に蛇を与える父親があるだろうか」という話をして、不完全な人間の父でさえ子供への愛を持つとすれば、まして「天の父においておや」と、神の愛を比喻で語り、神の側の確かさを強調します。ルカはこの両面を同時に語っているのですが、警えの引用では「熱心」の方に蛇を切りました。祈りに不熱心な「ルカの教会の人々」を前にしてあせているのだと思います。
- 3、ルカは、「真夜中に助けを求められた友人の話」というイエスの警え話を引用します。このお話はパレスチナの村の様子を生き生きと伝えています。パンは主婦が家族のために焼くのです。3個のパンが一食です。客をもてなすのはオリエント社会の義務でした。みんなぎりぎりの生活でしたから、いつも客の分の余裕があるとは限りません。しかし、村のあそこの家に行けばパンがあるということは分かっていました。だから、「パンを三つ貸してください」と友人の所に行ったのです。今の聖書学者たちは、本来のお話は7節までで終わっている、と言っています。「あなた方のうちに誰か友人がいて、真夜中にその人のところに行って、『私を突然訪ねてきた旅人のために必要なパンを貸してくれ』と頼んだとすると、この友人は『迷惑だ』と言って君の願いを断ったりするだろうか?」となります。7節の終わりは修辭疑問文で、そこには「否、誰もがそのような願いをむげに断ったりはしない!」という論旨になります。ルカは8節を付け加えました。「しかし、言っておく。友達だからということでは起きて何かを与えることはなくても、しつように頼めば、起きてきて、必要なものは何でも与えるであろう」と。「熱心に求める」人間の努力に論点を移してしまいました。もともとは、貧しくても「パンを融通するのは当たり前のこと」という、人間の経験のなかに「神の側の真実」が隠されている、そこに気がつきなさいよ、というお話だったのです。「乞われたら断れない」という、「助け合って生きる」のは「神の恵みの現実」なのです。その神の恵みの現実が、民衆の村の生活に豊かにあったのです。多くの人がそれを経験していたのです。「共に生かされている恵みの問題」です。そこに気がつくことが大切です。ルカは、そこを「熱心の」問題にしてしまいました。
- 4、中国の古い教えに孟子の「性善説」と荀子の「性悪説」があるように、聖書にも神の息吹を吹きかけられて生きる「創造の秩序の人間観」と「罪の桎梏にあえぐ、罪の人間観」があります。罪からの救いをイエス・キリストの十字架の贖いの一点に集中してみる「救済観」もありますが、それは聖書では一つの見方です。聖書は色々な語り方、そしていろいろな「救い」を豊かに宿した書物です。
- 5、「しつように頼めば」という物事の突破の仕方は確かにあります。しかし「祈り」をその面だけに方向づけると、息苦しくなります。ルカも迷ったのでしょう。最後は「聖霊を賜う神」で締めくくりました。ローマの手紙8章26節に「“霊”も弱い私たちを助けて下さいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成して下さるからです。」と「祈り」に先行する“霊”の執り成しの働きがある事を指摘しています。「“霊”の執り成し」に心を留めたいと思います。「しつように頼んで」いるのは人間の側ではなくて、見えない神の“霊”の働きなのだ、という事に気が付きたいと思います。「真夜中でも村(神の支配し給う所)にはパンがある」。これは神の恵みです。と同時に、私たちが気がつかないだけで、私たちが生かされている生活領域に隠されている宝を発見してゆきたいと存じます。

「今日の説教」 2012年3月18日 明治学院教会(267)

(このプリントは毎週作っているものです。)

「ピラトとは誰か」

牧師 岩井健作

聖書 ヨハネによる福音書 18章28節—40

1、「黒のアント(対義語アントニムの略)は、白。けれども白のアントは赤。赤のアントは、黒……」。太宰治はアントを探すことでそのものの実体をつかもうとしました。罪と祈り、罪と悔い、罪と告白、罪と……嗚呼、みなシノニムだ、罪の対語は何だ(『人間失格』)と言って苦しみました。

さて、私たちが教会に通い、また聖書を読み、祈りをささげ、讃美歌を歌い、人々と交わりを持ち、奉仕をし、社会活動に参加するのは何のためでしょうか。その問いを突き詰めてゆくと「神」を知ることでよい人生を掴むことだと言えます。その「神」は人間の観念に抱き込まれた神ではなく、自分の人生の伴侶として共にいまし、「私」の事をほんとうに知っている「神」を求めています。そうして、聖書は「神」を知ることはイエスを知り、イエスに倣い、イエスに従うことだと教えます。では「イエスとは誰か」。この問いは、信徒も求道者も牧師も、「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向け」(フィリピ3:13)る課題です。そういう意味では「イエスの対義語」が見つければ、イエスの実体を知る手掛かりになります。

2、「ポンテオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証をなされたイエス・キリスト」(テモテへの手紙一6:13)という表現があります。使徒信条にも「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という文言があります。ポンテオ・ピラトは聖書ではイエスの対義語のような気がします。「ピラトとは誰か」を知ることで、イエスとの出会いを深くしたいと存じます。

3、さて、今日はヨハネ18章、19章のピラトが登場する箇所の一部を読んでいただきました。ここには「ピラトが・・」と17回も出てきます。(共観福音書の該当箇所、マタイ7回、マルコ7回、ルカ10回)。ヨハネが断然多いのです。イエスを殺した力はユダヤ教の権力者たち、最高法院(祭司長、律法学者、支配者による構成)です。しかし、ユダヤはローマ帝国の支配下にあり、死刑の権限がありません。死刑執行権を行使したのはピラト(ローマのユダヤ総督26-36年)です。ユダヤ人の王(メシヤ)の僭称はユダヤでは死罪に当たります。しかしこれはユダヤ人の宗教問題です。ユダヤ人はピラトの官邸に入りません。逾越の食事(ユダヤのもっと重要な祭り)の時、ローマ人であるピラトの官邸に入ると汚れるからです(28節)。ピラトの方が官邸を出たり入ったりします(29、33、38、19:4、9、13)。植民地権力者が、現地民族を権力(武力)だけでは抑え込めない矛盾が出ています。イエスの無罪(ローマ法では)を認めながら、ピラトはユダヤ人の要求に屈します(マルコ15:15他)。皇帝の権威を使うユダヤ人の狡猾さがあります(ヨハネ19:12)。「一人の囚人を過ぎ越しに許す慣習」も行使できずに、強盗バラバを釈放させられてしまい、イエスを十字架刑に処してしまいます。優柔不断な男ピラトが浮き彫りにされます。

4、ヨハネのテーマは「真理について証をするために生まれた」イエスを明らかにすることでした。ピラトはイエスに「真理とは何か」(38節)という有名な問いを發します。この問いを持ちつつ、力に屈し、保身を保ち、不決断のまま、イエスの処刑の責任を負ってしまったのです。

5、イエス(真理、神)に関しては、従うか否かの決断が問題であって、いわゆる中立はないのです。「ピラトとは誰か」。それは不決断のゆえにイエスを殺した人間のことです。もしかするとピラトとは私であって、私がイエスを殺し続けているかもしれません。イエスは「真理について証をする。」「真理に属する人は皆、私の声を聞く」(17:37)と述べます。イエスのアントニムは「私」であるかも知れません。イエスの声を「聞きつつ」、ペトロのように躓きながらも、自分の人生を決断で繋いでゆく歩みをする人間でありたいと思います。

- 1、 「そこでピラトはイエスを捕え、鞭で打たせた。」19章の冒頭です。この鞭打ちは、ピラトには十字架の代案であったのですが、群衆の声の叫びが圧倒します。「十字架につけろ。十字架につけろ」(6)。ヨハネの執筆の時代は「ヨハネの」教会は、ユダヤ人から迫害を受けていましたので彼らが敵意の対象でした。ローマ支配に対しては、中立であることをことさらに示していました。だからピラトはイエスを助けようとする人間として描かれています。「この男には罪は見いだせない」と(6)。ユダヤ人は「この男を釈放すればあなたは皇帝の友ではない」(12)と脅します。最終的にピラトはイエスを死刑に引き渡します。不本意、不決断でイエスを死に追いやった者と、現在の「私、自分」とを重ねての聖書への洞察を前回(3・18)はいたしました。イエスは、ユダヤの宗教的権力者の強固は力とピラトの不決断と保身の生きざまゆえに十字架の死に迫られました。
- 2、 しかし、この枠組みの外でイエスへの侮蔑、翻弄が行われます。兵士の「気晴らし」としての私刑(リンチ)です。「紫の上着(王への皮肉)、平手で打つ、唾を吐きかける(マタイ 27:30)」の暴行です。兵士は国家の管理下にあり権力の行使の最先端ですが、彼らにリンチがゆだねられてはいません。しかし、「気晴らし」としてのリンチが黙認されるのです。現代で言えば、代用監獄である留置場での警察官僚の脅迫、暴力に類します。教育現場で教師の目の届かないところでの陰湿な「いじめ」です。軍隊ではこのような構造暴力は日常茶飯事だと思います。「気ばらし」についてパスカルは「我々の悲惨を慰めてくれる唯一のものは気ばらしである。とはいえそれこそ我々の悲劇のうちで最大の悲惨がある」(パンセ)と言っています。イエスはその苦難にさらされたのです。
- 3、 ピラトは「見よ、この男だ(原文は人)」(5)と言います。文脈からいえば「こんな哀れな男を死刑にしたいのか、この男だ、見ろ、罪はない、俺には関係ない」といった意味でしょう。しかし、ピラトはイエスを十字架につけるためにユダヤ人の脅迫に屈して、政治犯としてイエスを「彼らに引き渡した」(16)のです。しかし「この人を見よ」はもう一方で、悲惨の極みで、その悲惨の本質をくまなく抱え、それに耐え、なお憐れみをもって世界を包むイエスの隠された面を担って伝えられてきました。パッサンは「ヨハネ受難曲」でこの19章を「わが魂よ、痛ましい喜びと重荷にしみつけられた心をもってイエスの御苦しみはこの上ない幸いを見なさい。イエスの身体を刺す茨に天国の扉を開く花が開くのです。イエスの御苦しみから多くの甘い果実が生まれます。だから片時も目をはなさず彼を見つめなさい」とバスに歌わせています。悲惨と憐れみの二重性を宿した言葉として、ヨハネの文脈が暗示する以上の意味を、受難を黙想する歴史はたたえてきたことに目を注ぎたいと存じます。由木康氏は「馬槽のなかに」(21-280)の作詩で各節の終わりを「この人を見よ」で結びます。3節までと4節とのバランスに絶妙な信仰が示されています。

「今日の説教」 2012年4月8日 明治学院教会(269)

(このプリントは毎週作っているものです。)

「番兵たちは死人のように」

牧師 岩井健作

聖書 マタイによる福音書 27章62節—28章8節

- 1、この歳になって牧師として復活節の説教のテキストをマタイから選んだ経験が非常に少ない事に気が付きました。マルコには「ガリラヤでお会いできるであろう」というイエスの日常性への回帰のメッセージがあります。ルカには「エマオのキリスト」という食卓でパンを分かち合う絵画的復活のイメージがあります。ヨハネには失望のマリヤが「振り向くとそこにイエスが」という、振り向くという人生の転換が記されています。みな心に染みる美しい物語です。ところがマタイはマルコを下敷きにしていながら、全く異なった視点の物語を描きます。イエスの遺体が弟子たちに盗まれて「復活したという話」にならないように、①ピラトの了解のもとに番兵が見はっていたこと。②大きな地震が起きて主の天使が天から近寄り、「番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった」ということ。③ユダヤ人当局は「復活」の事実を打ち消すために番兵を金で買収し「寝ている間の盗難」説を流布させたという話です。これは、ユダヤ教の「イエスの死体盗難説」を再反論する論争的伝承をマタイが採用した物語なのです。結論から言えば、兵隊を用いるというような姑息な政治的手段(人間的わざ)を超えた「神の出来事」が「復活なのだ」という強力なメッセージを述べています。マタイ福音書の神学的主張は、その冒頭に明かにされたように「インマヌエル。神が共に在る。」(マタイ1:23、イザヤ7:14, 8:8, 10の信仰)という基調に貫かれています。その主張が復活の場面でも中心的メッセージになっているのです。
- 2、「兵隊が死人のようになる」事は、それが逆説的に「復活の証人」になっているとマタイ福音書の研究者ウィリッヒ・ルツがいつています。マタイは「見はる」「番兵」「兵士」と三つの兵隊を表す言葉が用をえています。いずれも軍隊の組織の一部分を示す用語です。兵士の大義は組織人として使命に殉じることです。日本の軍隊では「お国のために死ぬ。天皇のために死ぬ」事が至上命令でした。今のアメリカの兵隊は「命令によって動く」という訓練を徹底的にされています。兵卒というのは行動力であり、組織の手足です。「兵卒がいない」という諺があります。命令系統の将校(口ばかり)が多くて手足がないことをいいます。聖書でも「キリスト・イエスの立派な兵士として、わたしと共に苦しみを忍びなさい」(テモテⅡ 2:3)という使い方をされています。良い意味では、口の人になるな、足の人になれ、ともいえますが、悪い意味では、組織の手足になれ、自分の主体性はどうでもよいという意味にもなります。いずれにせよイエスの復活は、軍隊の価値体系の闇を破る出来事なのです。兵隊が悪いわけではありません。兵隊は生活上ならざるを得ない世の闇を荷うことを余儀なく押し付けられた人達なのです。この人達が「死人のようになる」事は逆に「復活」を証しているのです。「夜は更け、日は近づいている」(ローマ13:12)とパウロが言っています。現代的な意味で「復活」のいのちは、本当に闇の中を生きざるを得ない人が「死人のようになる」姿などあってはならないのです。だから私たちは「復活」を信じて生きるのです。
- 3、樋口健二さん(被爆労働者を40年近く追ひ続ける報道写真家、著書『これが原発だ、カメラがとらえた被爆者』岩波ジュニア新書)の発言を読んでいてびっくりしました。原発労働者の位置を書いています。「原発→元請け(東芝、三菱重工、日立の3社は本体を造り、パイプは住友)→下請け(これより未組織労働者)→孫請け→ひ孫請け→親方(人出し業、暴力団を含む)→日雇い労働者(農民、漁民、被差別部落民、元炭鉱労働者、大都市寄せ場、ホームレス等)。」この多重構造が原発を支えているという事実です。最底辺の人達は「死人のようになって」います。だからこそ「脱原発」を逆説的に力づけています。

「今日の説教」

2012年4月15日

明治学院教会（270）

（このプリントは毎週作っているものです。）

「弟子たちの派遣」

牧師 岩井健作

聖書 マタイによる福音書 28章16節—20節

1、マタイ福音書の最後の言葉は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（28：20）との堂々とした宣言である。マタイ福音書の始めには「神は我々と共におられる（インマヌエル）」（1：23）とある。「神が共におられる」とはマタイの一貫した主張である。しかし、この主張にはマタイ福音書の始めと終わりでは大きく変化している。この福音書は終始ユダヤ人（同邦）への宣教を使命としているが、終わりの所で諸国民（異邦人）に宣教せよと言っている。

2、10章5節、6節では弟子の派遣に際して「異邦人（エスノス）の道に行ってはならない・・・むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。」とあるのに、28章19節では「あなたがた行って、すべての民（エスノス「あらゆる異邦人たち」〔岩波訳〕）をわたしの弟子にきなさい」と言っている。エスノスには幅の広い意味があつて、異教徒、異邦人という意味から民族、国民までを表現する。前者は狭い意味、閉ざされた意味合い、後者は広い意味、開かれた意味合いで用いている。シリア地方が立地と言われるマタイの教会の事情があつたに違いない。おそらく、マタイの教会のなかで、イスラエル民族中心の伝道から、諸異邦人への伝道へと軸足を変えて行くには、きっと大議論があつたに違いない。伝道の方法、教会の地域社会との交流など全て未知の世界に乗り出して行つたと思われる。少なくとも「異邦人」と外から呼んできた締めくくり方が、「諸民族」の事を内から考えるあり方に変つたことは大きな出来事だ。マタイの最初の「神が我々と共に」という表現は「ユダヤ教の伝統とは別にイエスの誕生を救い主と信じる我々と共に」という意味であつた。しかしその「イエスと共に」の意味が、自分たちの安心や守りという意味であつたのなら、そのイエスと共にあることの意味が変化したのだ。ただ題目としてのイエスではなく、復活信仰後、彼が負い続けた十字架の道と共にという所に理解が深まったのだ。

3、28章の「弟子の派遣」の意味は、10章とは異なる。現代の多くの教会は10章の意味で「弟子の派遣」を理解しているのではないか。一般に宗教者が自分の信念に熱心で「伝道」するのは良い。しかしそれは「全ての民」と苦難や課題を共に担うと言う開かれた心が無ければ、偏狭さをまぬかれえない。マタイはむしろ開かれた宣教を示唆してこの福音書を終っている。教会が従来、この福音書の「諸民族」を、いわゆる19世紀の植民地主義といわれた（他民族の事を考えない）キリスト教の勢力拡張のスローガンとして使ってきた事を反省して、他民族・他文化共生の意味に再解釈しなくてはならないであろう。

4、今、世界のキリスト教は、「閉ざされたキリスト教」と「開かれたキリスト教」の区別が顕著である。もちろん水と油ではない。そこには問題提起、対話、が絶えず必要である。これは「宗教の世界」だけではなく、あらゆる領域のものの考え方にも言えることではないか。「原発稼働」が本当に「人類の救い」になると考えている人たちは多い。どうやって「脱原発」からの対話をするか、気の遠くなるような話である。神（イエス）は「いつもあなたがたと共にいる」という言葉に活かされてすすみたい。

- 1、 今日から、何回かヨハネの手紙Ⅰを学びます。新約聖書の中では「公同書簡(ヤコブ、ペトロⅠ、Ⅱ、ヨハネの手紙、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ユダの手紙、の七つ)」と集合的名称で呼ばれている(後197ごろから)ものの一つです。特定の宛先はありません。普遍的に妥当(公同)する信仰の証言が含まれているので「公同書簡」と呼ばれています。ヨハネの第一の手紙は、キリスト教徒として相応しい生活を送るようにという勧告と、教会の中に現れた「異端者」に対抗する指針を内容としています。異端者は「受肉の事実性{イエスの歴史性}」を否定し、キリスト者がなおも罪を犯すかもしれない可能性をも否定します(仮現論{イエスは先在の神の子が仮の姿をとってこの世に来たものとみなす。}、また当時のグノーシス{覚知主義}の流れの影響下にある考え方)。初期キリスト教史上初めて信仰者の生活における罪について論じたものです(3:6-9)。罪を犯したときは罪の告白によって赦しの体験が与えられる(1:7、2:2、5:14-16)。また「ヨハネ福音書」と用語と思想が近いので同一サークルに属する者が著者であったとされ、「ヨハネ」の名がつけられています。執筆場所はシリアアカエフェソの周辺で、執筆年代は紀元90-110年ごろです。
- 2、 1章1-4節の書き出しはヨハネ福音書の序文と似ています。ここの中心命題(ブルトマンによる)は3節の「わたしたちは・・・あなたがたにも伝える・・・」という文章です。伝えられる内容にはヨハネ福音書の鍵語が出てきます。「言(ロゴス)」「命」「証」「御父」「御子」です。この手紙は、いわゆる「異端」を論駁しているのですが、相手を「あなたがた」と呼んでいるところが注目すべき所です。異端ですから、白黒をはっきりさせて、切って捨てるというのが普通ですが、そのような外科手術的なやり方ではないのです。「交わりをもつために」(3節)対話をし、論議をしようというのです。もちろんはっきりすべきところはきつい言い方をしています。「偽り者とは、イエスがメシヤであることを否定する者でなくて誰でありましょう。御父と御子を認めないものは反キリストです」(2:22)。しかし、「交わりをもつために」共通基盤を「わたしたちの交わりは御父と御子イエス・キリストとの交わりです」(3節)と言います。論敵「あなたがた」は決して「反キリスト」ではありません。イエス理解の論点の置き方の違いです。イエスを「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたもの」(現在完了形の動詞)と捉えるのは「わたしたち」です。「あなたがた」はイエスを仮現論に従って抽象的、観念的に捉えるのです。だが「信仰とは、歴史の中で具体的に捕らえることができるような生活として現れるもので、きわめて現実的なものであり、実証性をもっている。」(飯清)。信仰に関しては現実と観念がひっくり返しになってはならないのです。現実とは体験が共有化され経験となって交わりの基盤となるものです。観念は同じであれば観念集団が出来、交わりは生まれません。交わりは、個別に違う経験が基盤になって生まれるものです。教会はイエス(・キリスト)との出会いの多様性があるからこそ、「教会」なのです。個人の経験の違いが「証し」として語り合われ、聞かれるところに、教会の豊かさがありましょう。

（このプリントは毎週作っているものです。）

「起きよ、光を放て」

牧師 岩井健作

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 1章1節—4節

イザヤ60章1節

1、「津波でんでんこ」と言ったのは片田敏孝氏（群馬大学教授）だった。3月11日釜石市では小中学生ほぼ全員が津波の難を逃れた。彼の防災指導の成果であった。4月同氏の講演会が鎌倉市であった。参加できなかったが、聴いた人が講演の逆説性に感銘を受けたという。「ハザードマップを信用するな」など。当日は「マップ」を作る側の行政の防災課の人もいて戸惑ったであろうという。彼は「逃げる」ということへの意識改革を説いたのである。一人一人の主体的真理というものは逆説をとまなびて伝えられる。

2、今日お読みした「ヨハネの手紙Ⅰ」の著者は、逆説性が全く分からない厄介な相手にものを言っている。「自分たちには罪がない」（8）と言ったのは当時のグノーシス化された信仰理解の人達のことである。当時の哲学にはグノーシス（目覚めた知識）主義があつて初代教会の信仰理解に影響を与えていた。宇宙を、光と闇、善と悪というように二元論で考え、グノーシスを究めることで人間は光に属し、救いに至るとされた。だから救いを求めて救われていたキリスト者はもう罪を犯さない、という固定観念を持っていた。それに対して、著者は、キリスト者も罪を犯す。問題は、「自分の罪を公に言い表して」（9）、神の赦しを乞うことが大事だと、反論した。「光の中を歩むなら」（7）「自分の罪を公に言い表すなら」という、こちら側の主体的振る舞いを通して、「罪から清められる」（7）「あらゆる不義から清めてくださる」（9）というのであって、機械仕掛け（オートマチック）に救いがあるのではない、というのだ。自分がどう受け取るかという決断が真理の受容には伴う。実際に、「ヨハネ第一」の教会の中には、観念的には「救い」に生きている、と言いながら、実際には「闇の中を歩んでいる」（6）人がいたのあろう。

3、「神は光りであつて、神には闇が全くない」（6）と言われていることも「神には（人にはではなく）」に強調点がある。闇の現実には生きている人間は、この神の光りを、主体的に受けなければ生きることにはならない。「神が光である」事に終末論的に生きる限りにおいて、つまり、最後には闇は光りには「勝たない」（口語聖書）と主体的に受け止める限りにおいて光の中を歩むことが出来る。ここのところの他の訳は「理解しなかった」（新共同訳）「阻止できなかった」（岩波訳）とある。原語は「到達する」という意味。最後には光が上回るということである。ヨハネ第一はそのことを「互いに交わりをもち、御子イエスの血によってあらゆる罪がら清められます」（7）と表現する。「光の中を歩む」ことは「人間の実存の一つの在り方」（ブルトマン）である。ブルトマンが「一つの」ということは決断を大事にする事を意味している。究極的な解決を神に委ねて保留しておくことが出来る在り方である。終末論的あり方とはそういう事を意味する。キリスト者とはこの保留を逆説的に抱いて生きる人間である。

4、「闇」に象徴される暗い出来事は、この連休の間を考えてもいっぱいある。7人も亡くなったバス事故。原発を再稼働させようとする勢力。市場原理主義を教育の世界に持ち込む「大阪府基本条例」（君が代不起立3回クビを含む）の脅威。放射能で自宅に帰れない仮設での孤独死。

イスラエル民族が捕囚から解放されて課題山積の時「起きよ、光を放て」と激励したのは、預言者「第三イザヤ」であった。その時代も闇が地を覆っていた。イエスの時代もそうであった。私達も、この闇の時代を、「闇の中の光り」であるイエスに従って、また生き始めたい。

（このプリントは毎週作っているものです。）

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 2：28—3：3（愛する者たち、わたしは、今既に神の子です3：2）

序 明治学院教会は1995年3月28日の法人439回理事会の「理事のキリスト者条項に弾力性を付与する決議」に基づき設立が意図されました。2003年5月25日に発足した単立明治学院教会が、その決議の「学院教会」に該当するものとして、改めて法人理事会と「合意書」を交わし、その日を創立記念日としました。今年で9年経ちました。

- 1、私は、2006年からこの教会の牧師を（神様から）仰せつかっています。2007年創立記念日に「戸塚のチャペル今日は教会」という説教で、「明治学院教会は風呂の蓋」だと申しました。「要る時に要らなくて、要らない時に要る」という意味です。必ずしも皆さんに納得いただけたかどうか疑問ですが、哲学を称して「ミネルバの梟」（ヘーゲル）と言ったような意味でした。教会は、執り成しの祈りと、世俗の価値観の相対化を迫る「十字架の福音」の宣教に徹す^スという事でした。
- 2、2010年には、この教会のあるべき方向を「集められた教会、散らされた教会（ギャザードチャーチ・スキャタードチャーチ）」と申し上げました。日曜日にはこのチャペルで礼拝のため集められ、週日はそれぞれ一人一人の信徒・求道者の生活現場に生きて働く「神の業」がある、という意味です。そのことをひしひしと感じたのは末期癌の方の病床でした。
- 3、昨年、この教会に3人の方が、会員として名を連ねられました。洗礼を受けられた姉妹は、長年御家族に繋がってキリスト教に関わりを持ってこられました。不思議なことにお家がこの教会に近いということで、ここで受洗に導かれました。洗礼式をじーっと見ていた一人の幼子がその後「僕も神の子になる」と言って、幼児洗礼を受けられました。それを機会にと、長年、母教会に籍を置かれていた「おばあさま」が、その大きな教会から小舟のような明治学院教会を、ご自分の地域の教会として選んでご転会になりました。この教会も大きな「見えない教会」につながっているのです。
- 4、今日のテキストには「御子の内にいつもとどまりなさい。そうすれば・・・御子が来られるとき、御前で恥じ入るようなことはありません」（2：28）とあります。「とどまる（待つ、残る、住む、続ける、生き長らえる、宿る）」がこの手紙には23回（新約118回中）も用いられています。信仰における主体的側面の重視です。しかし、本論は「御子が来られるとき」という客観的・歴史的側面にあります。難しい表現をすると「キリスト教信仰における終末的出来事は（現在のであって同時に将来的なものとして）、イエスの来臨という歴史的出来事に根拠を持っているという逆説の告知が主張するところに存在する」（ブルトマンP. 67）ということです。ひらたく言えば、「イエス様がおられる^スは確かなのだから、おたおたしないで、しっかりするのだ」ということです。
- 5、明治学院教会と賭けて何と解く。今年は私はダイヤモンドと解くと申し上げます。その心は、それぞれの研磨面が輝きを放つ。それぞれの信徒また礼拝参加者がそれぞれの生活で研磨面を与えられて輝きを放っているということです。その研磨面とはイエスの出来事（あの歴史的出来事）にとどまって（主体的に）生きるということです。「教会の個性」です。この教会も同じくです。

「聖霊のうめき」

聖書 ローマの信徒への手紙 8章18節—27節

「“霊” 自らが、言葉にならないうめきをもって執り成してくださるからです(26)」

1、新約聖書に、「うめき」という言葉は、ローマの手紙8章に3か所だけに出てきます。それぞれ原語と主語が違います。被造物がうめく(22節。シュステナゾー。共に・嘆息する[ここだけ]、<共に>が強調されている)。私たちがうめく(23節。ステナゾー。ため息をつく、5か所。マルコ7:34、イエスは深く息をつく。激しい感情。切望への経過が強調されている)。“霊” がうめく(26節。ステナグモス、うめく、ため息、<エジプトの民の>嘆き、使徒7:34、苦難への共苦に強調がある)。「うめき」はローマの手紙では積極的な意味を荷っています。

2、「痛みを分かち合う」ことの根源に、痛みを分かち合って下さるかたがいる、それがこの箇所のメッセージです。痛みを分かち合い、うめきを共にするということは一見先の見えない行き詰まりのような気がします。しかし、それは神の御業に参与することです。「聖霊のうめき」という働きを信じることでそれが現実のものとなっています。痛みを分かち合う以外にない場面で、じっと耐えていると、聖霊がうめきをもって執り成してくださるという大きな輪の中に入れられていることが次第に分かってきます。

3、フィリッピンの神学者の言葉が忘れられません。フィリッピンでは、かつて米軍基地を国内に置くか置かないかを巡って、闇の力が働いて、人が拘束され、脅迫死させられ、殺してしまう権力(背景は米国)が日常化していたと言います。そこで、『正義、平和、被造物の保全』のために闘っていた、民衆の神学者レヴィ・オラシオンは、『私たちは弱く、困惑しており、どのように祈るかすらも知らない。しかし、聖霊は私たちの助けとなって、私たちの痛みと苦しみをうめき、私たちのために執り成しをして下さる』と言っています。

4、「完成していた原発を放棄して以来、非原発国であり続けているオーストラリアで、原発を止めるためのデモは、最初、三人だった。その一人と話した時、彼は言っていた。『デモで歩き始めた時、後ろには誰もいなかった。しかし、私一人が行動しても何も変わらないとみんなが思っていることが、本当に世の中が変わらない原因だ』と。さあ、水の温度が少しずつ上がってきている。茹であがる前に声をあげよう。」(アイリーン・美緒子・スミス、月刊誌『世界』6月号)。十字架への道を歩むイエスは独りだった事を深く思いだします。「独り」と「聖霊のうめき」は呼応しています。

* 祈り。神よ、今私たちは、命を育む生活や社会の危機を経験しています。歯止めのかからない放射能汚染による環境破壊、経済至上主義のもたらす格差社会による差別と弱者の切り捨てなどを身近に感じています。私たち自身が、知らない間にその危機の増幅に加担をしています。その罪責を覚えます。私たちの罪をお許しください。私たちは、わたしたちの姿にうめきます。しかし、うめきを共にして下さる方の存在を信じ、その執り成しのゆえに、力をお与えください。教会が「聖霊の働き」として理解していることにはいろいろな面があります。「うめき」を共にして下さるという聖霊の働きをこのペンテコステの日信じ、たとえ独りであっても、この重い社会を生き抜き、神の希望を告げていく事をなさしめてください。主イエスの御名によって祈ります。アーメン

「当たって砕けよ」

聖書 ヨハネの手紙 一 2章1節—11節

「しかし、神の言葉を守るなら、まことにその人の内には、神の愛が実現します。」(2:5)

- 1、錯覚とか錯視ということがあります。新幹線がカーブにかかって車体が斜めになっているのに、窓からは広大な地面が斜めの坂になっているように思えるのです。中から見ているのと、外から見ているのとの違いです。ヨハネの手紙一の2章では著者は、中から神を見ている人達を批判しています。グノーシス(覚知)主義の人達のことです。彼らは「(私は)神を知っている(エグノーカ)」(4節)と言います。パウロは「神を知っている、いや、むしろ神から知られている」(ガラテヤ4:9)と、外からの見かたを同時に語っています。神を自分との関係の中で把握する事の、難しさや大事さを語っています。信仰というのは自分を神との関係の中で捉える、それゆえに人を関係(愛)そのものとして捉えるということです。関係の当事者になることなのです。
- 2、ヨハネの手紙一2:1-11はこのことをかなり丁寧に、4つの区分で言っています。
 - ① 1-2節。信仰の土台。神の知り方(弁護者の支援)。
 - ② 3-6節。信仰の目標。神を知ることの結果(掟を守ること)。
 - ③ 7-8節。信仰のカリキュラム(光の中を歩む)。
 - ④ 9-11節。信仰の実践。(兄弟を愛すること)。
- 3、まず、「神を知る」事では「知っているつもり」が打ち碎かれる経験から事柄がはじまりです。旧約の人物、アブラハム、ヤコブ、モーセ、ダビデ、サムエル、イザヤ、エレミヤ、みな然りです。彼らは、神に選ばれて、神から与えられた役目に生きたのです。主語は神です。次に、「打ち碎かれる」経験(回心)は自分本位な、傲慢な人間には難しいことです。その転換点を「罪を犯さないようになるため」(1)と言います。「罪(ハマルチア)」は「(神に向かって)的を外れ」ということです。自分本位、傲慢のことです。これを介助するのが「助け手・弁護者(バラクレートス)」です。弁護者はヨハネ福音書に出てきます。これは聖霊のことです(ヨハネ14:15以下)。2節の「贖罪論」は後世の教会の挿入です。
- 4、「神を知る」事は、認識の問題ではなく、掟を守ることだと、論を進めます。列車が軌道を、自動車が高速道路を走るように、掟は、「古く」すでにあつたものであるが、「新しく」自覚され直されるものなのです。「光の中のいる」と言っています。
- 5、今日の中心テーマは、「神の言葉を守るなら」の「なら」です。これは条件ではありません。行動の契機です。プールで底に付けている足を浮かせるようなものです。浮かせなければ泳ぎは始まりません。賀川豊彦没後50年に彼を評価した研究者は、彼をキリスト教の「オーソドクシー(正統教理)」の人ではなく「オーソプラクシー(正しい実践)」の人だと言いましたが、彼の実践はあらゆるところに今も生きています。救済、労働、農民、協同組合、普選、平和の諸運動。
- 6、ヨハネは「兄弟を愛せ」と言いました。イエスが「隣人」を超えて「敵」というのに比べて極めて消極的です。でも、足元からやらねば次には進まないものです。「教会」はまずそこからでしょうか。とにかく「当たって砕けよ」ということから始めることが信仰者の第一歩でしょう。

「今、神の御心とは何か」

聖書 ヨハネの手紙 一 2章12節—17節

「生活のおごりは、御父からでないで、世から出ているからです。」（2：16）

- 1、今日の聖書の「生活のおごり」という言葉で、今、何を連想しますか。「除染ゼネコンしか・・・巨額予算を丸投げ」。東京新聞（6月1日）の第一面見出しを私は思い出しました。原発建設で大儲けした大手ゼネコンが、放射能を除染して、また大儲けをする。片方で、帰宅困難者がいて、この人たちは、生活、仕事、財産、家族関係、希望までも奪われています。「ヨハネの手紙一」の言う「世も世にあるものの、愛してはなりません」（15）の言葉を生きようと思ったら、それは大変な価値観の闘いなのです。その闘いはイエスの言葉「自分の十字架を背負って、私に従いなさい」（マルコ8:34）を思いださせます。原発を容認しながら（現状の世の悪を抱え込み「おごった」生活をしながら）やってゆきましようという事は聖書の生き方からは出てこないと思います。
- 2、しかし、今日、この箇所から聴き届けたいメッセージは、そこが中心ではないのです。著者「ヨハネ」のこの箇所の語り方です。この書の目的は、前回も触れましたように、「ヨハネ」が手紙を宛てた教会（ヨハネの教会と一応言っておきます）のなかには「グノーシス主義」にかぶれて自分の信仰理解をひけらかし、「神を知っている」（4）と言い張るくせに、人間関係や生活のレベルで「愛のない」人達がいて、その人たちを「神の御心」へと戒めることが主眼だと申しました。鋭い批判をしているのです。しかし、ヨハネは、その人たちを排除してはいません。この人達とそうでない人とをはじめから分けて、批判を一部の人間だけに語ってはいません。その語り方を、12節から14節までにみると、「子たち」「父たち」「若者たち」に対して、極めて肯定的、抱擁的なのです。みんな「罪が許されている」（12）「初めから存在なさる方を知っている」（13）「御父を知っている」「神の言葉があなたの内にいつもあり」「悪い者に打ち勝った」（14）。譬えて言えば、外科手術的で患部へのメスを入れる方法ではなくて、内科的に全体の治癒力を信じて回復させようとする方法なのです。グノーシス批判にも拘わらず、全体包含的なのです。
- 3、私は、今までいろいろな市民運動に携わってきました。運動の論理を厳密にして、内部批判、内ゲバを鋭くすると、運動は分裂をします。そうかと言って、大きな基本目標をあいまいにすれば、運動は崩れてしまいます。平和、人権、差別、憲法、公害、命、市民生活、くらし、環境、脱原発、反戦、「・・・支える会」などなどをテーマにする運動は、当事者が絶えず、自分の在り方への批判、相互の内部批判、を鋭く持ちながらも、「神の御心」すなわち「愛」をもって、結びつきを信じ、作りだして行かないと、運動が長続きしません。矢内原忠雄氏（無教会指導者、東大総長）はかつてこのヨハネの手紙を「重複が多く、何だか、老ヨハネの繰言のような印象を避けがたいものがある」（『ヨハネ第一の研究』p.663）といっています。しかし、老ヨハネが、信仰の本質については、鋭い批判をもちながら、老若男女、様々な性格の人々が居る「教会」に老練な経験から愛を注いでいたことが読み取れます。「今、神の御心は」と問えば「生活のおごり」と決別すること、内々相互の批判をもちつつ「愛をもって」運動（教会も運動の一つ）を進めることではないでしょうか。

- ① 先週金曜日、「脱原発」で2万人が首相官邸を囲みました。「脱原発」運動には楕円のように二つの焦点があります。政府などへの批判と自分達のライフスタイルへの反省です。「ヨハネの手紙一」にはそれと同じように、外にある「異端説」への反駁・批判と内側での「兄弟愛実践」への反省という二つの焦点が繰り返されます。
- ② 今日の箇所には「反キリスト」という見出のように、激しい「異端説」反駁の箇所です。「異端説」の主唱者は自分達のキリスト教理解が正しいとの自己意識をもった教会内グループでした。背景は紀元1世紀ごろのグノーシス主義という独自の宗教思想でした。この分野での研究の第一人者聖書学者荒井献氏は「人間の本来的自己と、宇宙を否定的に超えた究極的存在(至高者)とが本質的に同一であるという『認識(ギリシャ語の「グノーシス」)を救済とみなす宗教思想のことである」(『新約聖書正典の成立』p.94)と定義しています。当時小アジアのケリントスは、この思想にたって、キリスト教を解釈し、救済者・至高者は、仮に地上のイエスに宿ったという「仮現説」を主張しました。この主張に対して、地上のイエスは「仮」ではなく、その人そのものが神の啓示者・救済者(キリスト)あるという「キリスト論(イエス無しでは済まされない)」を展開したのが本書です。「イエスがメシヤ」(2:22)というの信仰的な逆説なのです。
- ③ 「異端」は「正統」が自己を絶対化して、異なるものを排除する硬直さへ問いとして起ってきます。教会の制度、職制、教義の固定化の弊害に反発して、自由な認識・悟りをもって救済理解とする運動が起って不思議ではありません。異なるものとは対話が必要です。その点、ヨハネは批判しつつも包むという対話を持っています(2:12-17. 6/10レジュメ参照)。
- ④ しかし、グノーシス主義を枠としたキリスト教理解には限界、弊害があります。イエス無しで救済が成り立ちます。歴史のイエスの振る舞い、生涯こそが「神の出来事」であるという、逆説性がなくなってしまいます。つまり、イエスに関わらなくとも救済は成り立ち、救済を知識とすることが出来たのです。イエス(神)との関わりは、神がイエスにおいてこの世(人)と関わったことに基づき、その関係の中に生きる、実践的生き方(方法)を伴うことです。だから、「愛の戒めを守る」(3:11)を抜きにして救済に預かることは出来ないのです。「いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教えをうける必要がありません。この油が万事について教えます」(2:27)。「油」、つまりイエスとの関係が大事なのです。イエスを「弁護者」(2:1)として彼に従うことが救いなのです。
- ⑤ 知識は人を分け、愛は人を繋ぐ、と申します。人を繋がない「信仰理解」はどこかあやしいのではないのでしょうか。ヨハネの主張はそこにあります。「案じるよりは生むがやすい」とは、人を繋いできた実践的、経験的知恵の諺です。批判的主体でありつつ、繋ぐ温かさを！。これがヨハネの主張なのです。

ヨハネの手紙一 3章1節-12節

「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようなかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。」 (3:2)

- 1、「子どもの喧嘩に親がでる」という諺は、親のおとなげなさをたしなめたものです。子どもはいろいろ経験して成熟するのです。親はその成熟を見守ること、信じるのが役目です。親は子にとって終末論的存在（現在そうでありながら、やがて最後に真の意味が明らかされつつ出会う存在）です。親の棺の傍らで、親の存在の重さに涙していたある息子の姿を忘れることができません。
- 2、今日の聖書の箇所は、神はすでにイエスという歴史的存在のうちに十分自らを現されながら、なおやがて「御子のありのままを見る」(3:2)と言っています。この手紙が、グノーシス（認識）化された「救い」の理解を説く「偽り者」(2:22)とその「教え」(2:28)への反駁の書であることは繰り返し述べました。論敵は「神を知っている」(2:4)と言います。神を認識しているのです。その認識には時の経過がないのです。一種の「知的悟り」なのです。「御子に似たものとなるということを知る」という知り方とは違う「知り方」です。この「知り方」の違いが問題なのです。ヨハネは「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい」(3:1)と言います。「考える（エイドン）」は、知的認識ではありません。考察することですが、感じる、経験する、出会う、という幅を持った言葉です。それは知的、理性的営みですが時間の経過の中での営みです。「神の愛」を「人と人との関係（愛）」によって経験し、確かめてゆく知り方です。4節から10節には「法」（法の対儀語としての「罪」）とか「義」という概念がでて来ます。それは、「自分の兄弟を愛する」ということと同じ事柄だと言われています。つまり、「神の愛」は、「人を愛する」事柄の中で経験されるのだ、ということです。「神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人のうちにいつもあるからです」(3:9)とまで言っています。神関係と倫理は密接に結び付いています。それが結び付かないのがグノーシス<者>でした。ヨハネでは「義を行う＝イエス（御子）と似たものとなる＝互いに愛する（11節以下）」ことの全体が「知ること」でした。
- 3、11節以下で（ここはこの手紙唯一の旧約の引用、創世記4章）、カイン（農耕者）がアベル（牧畜者）を殺害する出来事を、「互いに愛し合うこと」の対極の話として語ります。歴史の文脈では「強者」と「弱者」の関係を象徴しています。現代的には軍事力（核の力）経済力で勝負する世界を象徴します。気の遠くなるような不条理の世界です。でもそこでの経験を通して神の愛が知られてゆくことは、終末論的出来事です。「これから自分を神にだんだんとゆだねていけると思う」と癌の末期に信仰告白をして受洗したある姉妹の「だんだん」という言葉が、不条理を突き抜ける希望と慰めとして思い起こされます。

「今日の説教・聴き手のために」 2012年7月15日明治学院教会(279)

(このプリントは毎週作っているものです。)

牧師 岩井健作

「足下から」

聖書 ヨハネの手紙 一 3章11節—24節

選句「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう。」(18節)

①「子たちよ」という呼びかけから考えると、熟年の教会指導者「老ヨハネ」が、「愛」について基本的なこと、ゆえに根源的なことを「親の愚痴」にも似て語っているように思えてなりません。なぜ根源的なことなのかは、24節「神がわたしたちのうちにとどまってくさる」とあるように、「愛し合う」という人間相互の関係は神関係と密接不可分な一体関係だからです。いやそんなことは分かっているという「賢い知識人(グノーシス思想的キリスト教理解の人)」、つまり「言葉や口先だけ」の人が存在するからヨハネはくどくならざるを得ないのです。そんな賢い人に「カインのように(弟殺しをやった) なってはなりません。」(12)と聖書の故事を引いて、「兄弟」という身近な足下の存在に神が存まし給うことを説くのです。神はアベルの神でもあるのです。

② 愛の根拠を語るために16節は「イエスはわたしたちのために命を捨ててくださいました」とキリストの贖罪論を語ります(4:9, 10に再度登場)。これは多分後世の教会が節を明確にするために入れた挿入であろうと註解者は指摘しています(プルトマン)。ヨハネの論は、愛の程度や、また贖罪論への気付きにあるのではなく、神関係(縦・信仰)と人間相互の関係(横・倫理)の二つの関係がいつも自覚され、全体として、あるいは経験としてつかめていないことへの注意なのです。二つがバラバラに分離していることを「言葉や口先だけ」と批判しています。平たく言えば「神によって生かされていることの全体」を悟っていないのです。

③ それでも、新約学者のシュタウファーはこのヨハネを批判します。「兄弟愛」を説くヨハネはイエスへの理解が不徹底だと指摘します。イエスは「敵を愛し迫害するもののために祈れ」(マタイ5:43)と言われた。「ヨハネのキリストは敵のためにではなく、友のために死ぬ(3:16)。彼が弟子たちに告げる新しい戒めは敵への愛ではなくて、兄弟への愛である(3:13, 23)・・・この壁の中の愛・・・と蔽しの心構えは共同体の外部との境界で急に消え失せる」(『イエスの使信』256ページ)。厳しい批判です。ヨハネだって、「兄弟愛」の射程に、兄弟への「同情」(3:17)を説きます。「世の富(ピオス)」は①生涯②生活、生計③生活必需品、物資、富(マルコ12:44、ルカ15:12、ヨハネ一2:16、3:17)を持っているものに対してです。かなり具体的な日常生活の分かち合いです。でも「同情(スプランクノン)、憐れみ」は名詞形です。自分が中心であり、主役であるものの見方です。イエスに関する限り、この語は「スプランクニゾマイ(憐れむ)」の動詞形で用いられ、「関わり」であり「行動」なのです。世の現実(貧困、格差、抑圧、差別)を客観的に見るのではなく、即「関わり」なのです。実存が連帯なのです。「兄弟」は

④ 私のわき役ではなく、「わき役」を含めて、そこに「主が命を捨ててくださった」という出来事が起っているのです。イエスは徹底して状況を生きられたということです。ヨハネだってそのこと知っていたでしょう。でも、ヨハネはそこから語らねばならなかったのでしょう。自分のことしか考えない「わがまま」に神は「足下にいましたもう」と精一杯自覚を促しているのです。

選句「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛しあうならば、神がわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内に全うされているのです。」(12節)

① ごめんなさい。ちょっと難しい表現になってしまうのですが、この箇所をまとめさせていただきます。この箇所は4章1節-6節との対比で読む必要があります。

「イエス・キリストが肉体をとって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出ています。・・・イエスのことを公に言い表わさない霊は神から出ていません。」(4:2,3)。ここには、キリスト(メシヤ・救い主)理解の違いが示されています。歴史のイエスの生涯と業に神の啓示を見ようとしなくて、グノーシス(特別な宗教的認識)にキリストを見ようとする「偽預言者」(4:1)への反駁が文脈にあります。

「グノーシス」者の救済観は特別な「知」に収斂されて、人間や歴史や倫理と、関係なしで「宗教的救い」が認識されるというのです。ひらたく言えば、兄弟も、隣人も、「敵」さえもどうでもよいのです。それに対してイエスに神を見る見方は「愛」が必要なのです。これが4:7-12です。「愛することのない者は、神をしりません」(8)の如く、交わりに身を置くことなくしては救いの体得、会得、習得はないのです。

② この箇所には大事な二点があります。①「愛は神から」(7)。愛の根拠は神にあって、人間の内からは出てこないということです。このことを徹底し、筋を通すために、「独り子の派遣」(9)「罪を償ういけにえ」(10)の思想を挿入付加したのは後代の教会だといわれています。「神から」の「から」は起源と本質を特徴づけています。「啓示宗教」の根幹、聖書の信仰の基本です。その「神から」を「イエス」に集中するのがヨハネです。②「愛しあうならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり」(12)。神は徹底して、人間の外なるものであるにも拘らず、「内にとどまる」という逆説が語られます。ここでは、ヨハネが主張する、神関係(信仰)と人間関係(倫理・愛)は切り離せないという大きな構造があります。「ヨハネの手紙」を学ぶ大事な点です(たとえ、ヨハネの愛は、イエスの愛敵と違って「壁の中の愛」だという批判があったとしても)。

③ さて、次に、人間つまり我々の次元の問題です。ヨハネは「愛しあうべき」(11)だとも「愛し合うならば」(12)ともいっています。「べき」は、努力目標です。「ならば」は、可能性を秘めた促しです。いずれふせよ、我々が、愛の主体になりうることが肯定されています。ここは大事なところです。愛は「独り子の派遣」という神の痛みの出来事ですが、それに与かることが、認められているのです。他者を生かす小さな愛(関わり、痛み、労苦)でも、それは「神がわたしたちの内にとどまってくださ」(12)る徴である事を、私は「救い」として喜びといたします。

「神は愛なり」(定義ではなく、働きの意味)(8)「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛した」(10)など、名句の多いこの箇所を身につけたいと存じます。「神の痛みに与かる」具体例のお話は皆様がお聞かせください。

1、3・11以後を生きる者たちにとっては、関西電力の社長の「原発を次々に再稼働させる」と公然と言い放つ言い方(7/25)には、この時代の「神を畏れない冒涇、人間の傲慢」の象徴を覚えざるを得ません。「フクシマ」の核惨事犠牲者の苦悩と核廃棄物の根本的処理方法のない現実を覚える者にとっては、「今の苦悩を思え」「神を畏れよ」「謙虚さを知れ」と、この人に叫ばざるを得ません(はがきを出しました)。

2、聖書(新共同訳)は「畏れよ」と語ります。「神との関係」での人間の傲慢、そして自己中心、私利私欲を厳しく戒めます。例を引きます。「主を畏れることは知恵の初め」(箴言1:7)。「生きている限り、あなたの神、主を畏れ、」(申命記6:2)。

「その憐れみは、・・・主を畏れる者に及ぶ」(ルカ1:50)。「キリストに対する畏をもって」(エフェ5:21)など。畏敬の文化に注目したいと思います。

3、他方、権力、資本の恫喝に屈しては、弱い命(例えば放射能の中の乳幼児)を守ることはできません。「フクシマ」では、若い母親が必死の闘いを継続しています。独善的な力を恐れては、守るべき命を奪われる危険があります。

4、聖書は「恐れてはならない」と語ります。例を挙げます。「アブラハムよ恐れてはならない」(創世記15:1)「恐れてはならない。落ち着いて、今日、・・・主が今日なされる救いを見なさい」(出エ14:13)。「落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない。」(イザヤ7:4)。「恐れるな。わたしは民全体に与える大きな喜びを告げる」(ルカ2:10)。「恐れるな、私は最初の者にして最後の者」(黙示録1:17)。神共にいますゆえに恐れぬ文化こそ民主主義の系譜ではないでしょうか。神を畏れるゆえに、人を恐れぬ、これが信仰者の基本的生活態度です。

⑤ ところが、ヨハネはこのパターンで「恐れ」を語りません。そもそもヨハネには外から迫る神、告発する神は出てきません。内にいます神、宿る神、愛する神、が出てきます。「神がまず私たちを愛してくださった」(10, 19)。「神はご自分の霊を分け与えてくださいました」(13)。「神は愛です」(8, 16,)。大胆にも「この世でわたしたちも、イエスのようである」(17)と言います。ここまで言ってよいのでしょうか。そして兄弟への愛は当然のように命じられます。「神は愛である」(説明ではなく、出来事)から、愛の主体たれと、徹頭徹尾促されます。「畏れ・恐れ」の関係が持っている「告発」「問題提起」「恫喝」を超越しているのです。被差別部落の解放運動では「糾弾」がつきものでしたが、ある運動家から、信頼から出発しようといわれると、被差別には無理解で、弱い者も、主体を喚起されて、恐れからではなく、信頼から運動に引き入れられて行くという経験をもったことがあります。ヨハネは神の愛の確かさゆえに、愛の主体たるべき責任を人に預けるのです。そして人と人との愛の経験には神の愛が投影されていることを暗示します。自分の責任で人を愛する(たとえ不完全でも)主体であれ、との促しがまず先なのです。愛は隠された遺産なのです。足下の遺産を掘り起こす生き方です。「ぶどう畑の宝物」の寓話を思い起こします。

1、アモス書は、旧約聖書の大きな分類、「律法」「預言」「諸書」のうちの「預言」に属する。さらにその中の一群の文書「12小預言書」の一つである。イスラエル民族は出エジプトの後、部族間の宗教連合により治められてきた。紀元前10世紀頃、ダビデにより統一王国・国家が作られた。その後王国は、北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂した。アモスは北王国ヤラベヤム二世(B.C786-746)の時代の人であった。この頃、世界の覇者、北のアッシリヤも南のエジプトも勢力を弱めていた。それも手伝ってか、小国北イスラエルは大いに繁栄した。国内では富の集中化が進み、格差が広がった。その背景には権力による不正・不義があった。「あなたがたは、正しい者をしいたげ、まいないを取り、門(裁判)で貧しい者を退ける。それゆえ、このような時には賢いものは沈黙する。これは悪い時代だからである。」(5:11-13)とアモスは描写する。この書は、墮落した国家への批判を、苦難にあえぐ民衆の側にある神の叫びとして告げる、旧約聖書のユニークな一書である。

3、アモスとは誰か。アモスは牧畜を生業としていた(7:14)。ヤハウェ信仰の契約共同体理念を忠実に営んでいる平凡な生活者であった。彼はその生活の場で神の召命を受け預言者活動に入った。決して職業的宗教家ではなかった。

4、5:21-35は、聖所で行なわれていた巡礼の祭儀を批判し、他方で、貧しい人達を顧みる正義の実現を求めた「神の委宣」である。繁栄に潤う上層部の人達が、巡礼という祭りに、解放感をもとめ、歌を歌う。他方で弱い立場の者を足蹴りにしている無自覚さに神の審きが告げられる。巡礼の祭りとは正義の実現とが、ばらばらになっていることへの批判である。祭儀そのものの否定ではない。

5、「正義」・ミシュバート(公道、審きとも訳されている)は法的な「判決」を含む法の正義。社会的公平・公正といった意味合い。

「恵みの業」・ツェダーカー(正義と訳されることが多い)は英語ではジャスティス、ライチャスネスと訳されている。法と対比して倫理的意味合いの言葉。神の義は恵みと憐れみを含むという意味の訳。法と倫理は相俟って深められる。人間の秩序の外と内である。倫理(恵みへの応答)に裏打ちされない法(神の義への招き)はない。

「神の託宣」は、建て前や律法の語りではない。預かり語る預言者自らの内省が含まれている。預言者の言葉が律法と異なるところだ。

6、アモスの状況を、今の日本に類比させた時、皆様はどんなことを想像するだろうか。これは一人一人違うと思う。私には「祭儀」は形骸化した民主主義という祭りに重なる。政治は「祭りごと」である。選挙で、マニフェストを掲げてお祭りを済ませば、あとは「正義」も「恵みのわざ」も何もないといった酷さを感じる。大飯原発の活断層の再調査は電力企業グループの下請けがやっている(週刊金曜日)。「苛立ちの時は過ぎ去り腹立ちの日々は残りし疑惑のつもりぬ」「君が歩の歩幅にあわせ歩みきぬ小出助教の無視の種蒔き」 友人の近詠、50首から拾った。

1、「世に打ち勝つ」。これはヨハネ文書独特の言葉です。でも「世に打ち勝つ」などとなんて簡単にいってよいのでしょうか。「世」は闇が支配しているのです。そんなに打ち勝てるようなものではありません。8月1日にT新聞の第一面に、マイクを握る山本昭彦さん（水俣病不知火 [しらぬび] 患者関東支部）の苦渋にうちひしがれた顔写真が載せられていました（裏面参照）。政府はこの日をもって特措法救済を締切りました。確認から56年。まだ申し出られない患者がいるのです。「切り捨て」を考えると「世」の力の前に打ちのめされている表情です。この類いの「世」の力は、核、沖縄、貧困、虐待、自殺など、日常いやという程見せつけられています。

2、ヨハネはどういう意味で「世に勝つ」といっているのでしょうか。それには次の言葉がヒントになります。「この方は、水と血を通してこられた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによってこられたのです」（5:6）。ここにはイエスの洗礼（水）だけではなく十字架の苦難と死（血）の強調があります。ヨハネの論敵グノーシス化された「偽教師」たちの救済観は「水」を強調します。地上のイエスには洗礼の時に天なるキリストが結び付き、受難の前にキリストは離れた、そのキリストへの認識が救いの根幹をなすという主張です。十字架の死に重きをおかないのです。その救済観は知識（覚知）の観念体系です。完結性を持っています。知識に陶醉している人は「独り」で「救われる」のです。結局「水」は自己完結を象徴しています。しかし「血」は神が他者と共にある在り方を示しています。十字架の死は、神が自らの自己完結を破って（フィリ2:6-8）、他者と共にあり続けるところに救済を示すで出来事でした。「世」の全ての出来事の動機付けをヨハネはこの自己完結に見ます。イエスの十字架の受難と死は、他者と苦難を共にし、自己の死を通して、逆説的に共に生きる道（愛）を打ち立てた出来事でした。ここに「世」に打ち勝つ根拠を見ます。だから「イエスが神の子である」（5:5）ことへの「信」が大事なのです。「キリストへの覚知が救済である」との主張とは歴然と違うのです。「あなたがたはこの世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ16:33）とあります。苦難には、勇気をもって対処してゆくのが、イエスに従う道です。

「世」との攻めき合いの極みでイエスの十字架の苦難と死を想起して、「世」に流さればなしでない生き方に逆転してゆくことが「世に打ち勝つ」ことです。

3、もう40年近く前、牧会の中で出会った一人の青年の生き方を思い起こします。彼の兄は国立大学の優秀な学生でした。しかし、突然自死してしまいました。教育者の両親の嘆きは大きいものでした。その頃は、日本の高度成長期で競争社会でした。皆エリートを目指して大学へゆきました。弟も優秀な高校生で、トップの大学への進学が期待されていました。しかし兄の死を受け止めた彼は大学進学を止めて、専門学校で理学療法士の道を選び、生涯、障がい者や弱者に仕える仕事に励んでいます。彼は兄の死を通して「世」の在り方に流されないで自分の人生を展開しました。兄の死を虚しくしませんでした。「世に勝つ」生き方ではないでしょうか。

1、アモスの預言は、イスラエルの支配階級の社会的不正と民族主義的傲慢を批判します。一貫した倫理性と普遍性に特徴がありますから、彼の活動の期間は短く、残された真性の言葉の数（書物の編集段階で弟子たちが挿入した箇所もある）は多くはありませんが、簡潔で力強い預言は、聖書の預言書では古典的意味と響きを持っていて、多くの人の心に残り、力を与えます。

2、1章から2章は、当時の諸国民への神の審判の宣告の箇所です。アラム〔首都ダマスコ〕(1:3-5)、ペリシテ〔ガザ〕(6-8)、フェニキア〔ティルス〕(9-10)、エドム(11-12)、アンモン(13-15)、モアブ(2:1-3)、ユダ(2:1-13)、の順に出てきます。その最後に、アモスの自国、イスラエルの罪が取り上げられ(2:6-16)、最も厳しく批判されます。この構成は独特で、リズムカルな詩になっています。7つの国々は、地中海側の古い敵対関係のペリシテとフェニキアを除けば、東北南は元来イスラエルと先祖を共にする同胞諸国であり、常に平和な友好関係が保たれるべき国々であります。それらの国への審きを、「いいきみだ」ぐらいの他人事としている感覚に、実はイスラエルの傲慢があります。

3、アラムからユダに及ぶ7つの国の残酷きわまりない国家犯罪が次々と指摘されています。文学的構成では、これは自国イスラエルの罪の指摘への「誘導」となっています。敵の野蛮と残酷に対して怒りを燃そうとしていたイスラエルの聴衆・為政者は、突如それが我が身のこととして、犯罪が暴露されます（王ダビデに対する預言者ナタンの叱責の物語を思い出します。サムエル記下12章参照）。旧約学者木田献一氏はイスラエルに関しては①契約に基づく同胞倫理の侵害、②ヤハウェ（主）に対する救済的導きに対する拒否、が罪の指摘としてあげられていると述べています(2:6-8, 9-12, 「イスラエル預言者の職務と文学」)。諸外国の罪は国際紛争に関わるものです。しかしイスラエルの罪はヤハウェとの関係の裏切りの問題として指摘されています。ここが本書の目的です。彼らは選びの民であればこそ、彼らイスラエルに対する神の審判は厳しく、徹底したものだと語られます(2:13-16)。

4、現代の問題に翻訳すれば、核被曝国であればこそ核廃絶（脱原発）に厳しくあるべきでだということに、その国が鈍感であることの罪に譬えられます。他国以上に核被曝国のモラルが厳しく問われるのです。当然のことが近すぎて分からないことを、諺では「灯台もと暗し」といいます。「フクシマ」の事故では、ドイツは「原発ゼロ政策」に舵を切りました。日本でも民衆は8割が声を挙げています。しかし為政者の鈍感さかたくなさは、アモスの時代の為政者を思い出します。

5、6-8節。靴一足の値で人が売られています。驚くべき格差社会です。弱者、苦悩する者への理解はおろか、彼らは虐げられます。神殿娼婦の現実（エゼキエル22:11）が情報化されます。貧しい者の衣服の質（出22:25 日没までに返す）、担保の酒で神殿を汚すなど、相当に悪いことをやっています。神に仕えるナジル人や預言者までが買収されます。世の改革は難航します。だからアモスの存在が希望なのです。

1、アモスの出身地テコアはベツレヘムの南8キロの町。海拔850mで東にユダの荒れ野と死海を見下ろす地。ここで彼は羊を飼い、いちじく桑（貧しい者たちの食料）を栽培した。彼自身は当時の最下層小作農民というより自営農（中産）であった。エルサレムの王、貴族、祭司ら富裕層の体制を拠り所とした律法の宗教とは別な、素朴な信仰によって生活をしていた。7章始めには、アモスが見た三つの幻が記されている。これはアモスが預言者としての召命を受ける以前の神からの幻である、とされる。

2－1。第一は「いなご」の幻である(1-3)。旱魃があれば、いなごは作物に襲いかかる。「一番草」は王の軍馬の食料として供出させられた。「二番草」は春の雨の時に生え、これは農民の家畜が夏を越すための飼料である。いなごに全てを食い尽くされては、農民は飢える以外にない。「ヤコブはちいさいものです」と神に執り成しを求めて、聞き入れられた。「ヤコブ」は元来はイサクの子の名(創世記32:23f)。兄エサウとの和解にあたりベヌエルで神の使いとの格闘(和解を意味する)に勝って名をイスラエルと変えられる。そこから神の祝福としてのイスラエルが用いられるが、後々これは国家の名となり、権力の象徴となる。アモスは敢えてその「ヤコブ」を用いて、神の審判には赦しを乞う以外にない貧しい最下層の農民を覚えて執り成しをする。アモスは強いイスラエルの系譜ではなく、ヤコブの系譜を自覚していた。

2－2。第二は「火(日照り)」の幻(4-6)。地の淵を涸らしてしまう厳しい日照り(火)である。夏の出来事。地下水源の枯渇の結果、作物の枯死する。アモスはもっと端的に「やめてください」と嘆願する。神の憐れみ以外に立つ場のない農民の魂の在りよう「小さいもの」が受け入れられて、執り成しは聞き入れられいた。

2－3。第3の幻(7-8,9は後世の付加)は、<振り下げ(計り縄)>の幻。神が城壁の上に立って<振り下げ>をもって立っている姿である。城壁は正しく積み上げなければ崩壊してしまう。<振り下げ>で試して傾いていればやり直す以外にない。イスラエルの罪(3-6章)は、もはや「神の民イスラエル」としての実質を喪失させていた。神の審判は必然であった。アモスはもう執り成しはしなかった。

3。彼は預言者としての召命を受ける前に、生活者として、既に神との人格的出会を経験していた。その基礎が預言者活動に決定的意味を持っていた。この出会いは、神が圧倒的な威力をもってこの人物を活かし、不可抗的に捕ら、彼が無条件に神の命令に従う召命を与えられた経験であった。彼は神に対してのみ義務を負って立つ存在となった。神こそが彼の思考の原点である。神中心(人間の相対化)が彼をしてあえてイスラエル(国家の絶対化)に対立させた。彼の審判思想は、根源的、究極的に神の本質を表している。今まで自明とされた「祭儀」「選民思想」とも対決した。

4、しかし、神の審判の前に、「小さい存在ヤコブ」(貧しい、無力な民衆を意識している)に自らの身を重ねて「としなし」をした預言者であった。執り成しとは何か。

「神との人格的出会い」(A, バイザー) だという。他者を思って神に祈る在りようだとも言える。真剣なとしなしは神に向かって魂を注ぎだした出会いであろう。

1、アモスの素描が今日の(7:10-17、アモスを記述した唯一三人称記録)箇所です。彼は、テコア(エルサレムから20kmの高地、前回参照)の出身。小家畜(羊、山羊)を所有し飼っていた。また、平野地でいちじく桑の木を栽培していたとされます(諸説あり)。かれは生活の現場から神の召命を受け(7:15) 750B.C.頃ベテルで10年活動した。国際情勢には詳しく、自国の歴史に通じイスラエルのヤハウエ信仰に立った人です。都会人ではなかった(7:14, 2:13, 3:12, 4:9)が、預言を記述する(編集は後になされたが、本文には彼の記述を多く含む)知識人であった。風貌は野人であったらしい(3:1-6, 4:9, 5:19)。アモスの預言内容はすでに何回か見て来たように、権力で踏みこまれた貧しい者たちの人間性の回復で、権力への神の審判を語りました。王ヤラベヤムⅡ(786-746B.C.)の「悪」の根本を突いていたのです。

2、その活動は王への「反逆者」呼ばわりをされます。王の国家体制を支えていた神殿ベテルの祭司アマジャ(7:10, 12)の発言です。「ユダに逃れ、そこで糧を得よ」といかにも温情を示します。アマジャは「この国は彼のすべてのことばに耐えられません」(10)と、アモスの言葉に真理性を感じていたのです。しかし権力は彼を排除しました。「預言者」の処刑は民衆を動揺させます。アモスの死については分かりません。彼の祭司と王への警告の言葉(11, 17)は約30年後、イスラエルの滅亡となって実現します。「あなたがたより前の預言者たちも同じように迫害された」と福音書が述べている(マタイ5:12)ようにアモスは預言者の系譜の先駆者の一人でありました。

3、彼が権力にたじろがずに向き合った根拠は「神の召命(vocation, calling)」でした。召命とは何か。「信仰者が自分の信仰体験を内省することから生まれる使命意識の自覚であり、信仰による生路の決断である。ルターは召命を・・職業も神から受けた使命である(Beruf[職業]は、それへと呼ばれることを原義とした)と強調した」(岩波キリスト教辞典)。イスラエルには神殿や職業祭司・預言者集団とは別に、ヤハウエ(主)への信仰が民衆と共に生きていて、アモスはその系譜にあった人です。そこに保たれていた「神の言葉」が、あらゆる人間的保全(墮落した祭司の営み)を超えて歴史の中で生きたものとなったのです。

4、さて、今日、日本の国家体制の根本的権力構造の影には何としてもアメリカの国家体制(資本と軍事力とメディア)があります。この1月沖縄では「アメリカに米軍基地に苦しむ沖縄の声を届ける会(団長山内徳信参議院議員)」が出かけ^ています。ここにアメリカ支配の実相がでています。「原子力ムラ」の構造、経済・技術の仕組みの根本にはアメリカとの関連があります。「日米安保条約」はその仕組みの一つです。今日9月9日午前11時の時間「オスプレイ」の持ち込みに反対する沖縄県民集会(11万人規模)で行なわれています。首相官邸前の金曜日デモ、通産省前テントひろばでの「包囲アクション」(9.11)。国家体制に「否」をいうのは一人一人勇気がいります。私は「小さなアモス」「十字架のイエスに従う者」の投影をここに見ます。

1、アモス書のこの箇所を読んでいて、私は子供の頃を思い出しました。今から68年位前の日本の国の状況です。太平洋戦争の時代、天皇絶対の軍国主義でした。小学校では毎月始め、全校生が教師に引率され氏神様に、戦勝祈願のお参りをしました。日本が戦争に勝ちますように、そのために神風が吹きますように、そして戦地の兵隊さんを守ってください、ということだったと思います。「神風」というのは、「蒙古来襲、元寇」の古事に因んだ言葉です。1274年と1281年には10万の兵で元軍は壱岐・対馬を侵し博多に迫り攻めましたが、二度とも大風、すなわち神風が起こって、全軍沈没をしたという古事です。これは後に、宗教は国難を救うことに使われ、日本の国家神道（国家と宗教の分離を超える）は、「神風」を求める戦争遂行の精神的柱となり、靖国神社、伊勢神宮はその中心となり、神社神道（本来は宗教）はその構造に統括されました。キリスト教でも宗教団体法で統合（日本基督教団の成立）が行なわれ、必勝祈願・祈祷会が行なわれました。戦争遂行の宗教政策の一貫でした。

2、「ベテルに助けを求めるな、ギルガルに行くな、ベエル・シバに赴くな」(5)は、当時の国家宗教の祭壇で「神風」を祈るほどの場所でした。「神風」はアモスでは「主の日」[5:18]でした。「主の日」信仰から自由になって、「わたし（ヤハウェ・主）を、求めよ、そして生きよ」は国家宗教の拒否という、凄惨な個人の決断を含んでいます。アモスは当時の宗教国家の側からは反逆者の烙印を押されました(7:10-13 先週説教箇所)。民衆に習慣化させられた巡礼や供儀や農耕の豊作祈願が結局は、人間的利害に「神」に従属せしめるものであるならば、「“救い”の人間的取り込み」であって、ヤハウェ宗教本来の神関係（命、魂、人格を生かす関係）ではないことを、「わたしを求めよ」の一句が鮮明にしています。民衆が「生き伸びる」ための保証とした祭壇の神観念の大転換をアモスは求めたのです。（新約でいえば、「神を愛することから、神がわたしたちを愛したこと」への主語の大転換です。[ヨハ14:10]）。

3、さて、「善を求めよ」(14)は、「わたし（神）を求めよ」との内的つながりで語られます。現代的にいえば「宗教と倫理」の問題です。頭や、口先だけの信仰者ではダメなのです。旧約学者関根清三氏の言葉によれば「最終的判断は神の『憐れみ』(5:15)に委ねられつつも、それに関わるものとして、神に対する能動的な働きかけが語られている。つまり、人間の主体的な歴史形成の責任と、それでも歴史を超えるものへの信仰とのバランスが説かれている。」とあります。またA. ヴァイザーは「神への献身は、善に対する服従への真の源泉だからである。」と別な面から言っています。

4、いまわたしたちの社会は「経済性か命か」という問いに直面しています。福島の子供たちに始まる決断は「個人の内面の事柄であり、その集積として多くの人が原発には頼らないと決めたのである」（東京新聞名古屋本社、深田稔論説主幹2012/9/15）と指摘しています。信仰は個人のことであり、「善を求める」決断は個人の決断です。しかし、同時に経済と効率の社会を拒否する原動力であることは希望です。

1、アモス書を読んで、一句だけその言葉を選べ、といわれたら皆様はどの言葉を選ばれるでしょうか。もちろん人により千差万別でありましょう。また、どの人でもその人が経験している人生の時期・場面によって異なるでしょう。私は、今回、アモス書を再読しながら「正義を洪水のように、恵みの業を大河のように尽きる事なく流れさせよ」(5:24)という言葉が心に残っています。どちらかということアモス書は圧倒的に「正義」への先鋭な叫び、それゆえに「神の審判」の言葉に満ちています。アモスの預言者的任務は、時代的に、場所的に、内容的に、神の審きを、あの「貧しいものを靴一足の値で買い取ろう」(8:6)という墮落に満ちた状況、また背信のイスラエル王国の政治的、商業的、宗教的指導者たちに語られたものでした(7:10-17 参照)。

2、ところが、アモス書の結尾の今日の箇所(9:11-15)では、イスラエルの「復興」(11-12)と「永遠の救い」(13-15)が語られていますから、読んだ時に、「審判」とは違った響きを感じて、これは本来のアモスのものではない、後世(バビロニア補囚以後の神の審判理解)の預言が付加されたものだ、考える研究者がいても不思議ではありません。大方の理解はそれに傾いています。しかし、日本の研究者では、木田献一氏は、後代の付加としながらも、審判の告知は悔い改めを予想しているから、救済を語ることは、アモスに矛盾していないとします。関根清三氏は、アモスが審判を語っただけの預言者ではなく、悔い改めを同時に語り、貧しい者へ心を砕いた預言者であるから、「義」と同時に「恵みの業、愛」を語った側面に重きを置き、この箇所は矛盾なくアモスのものだとします。

3、「イスラエルの土地そのものが楽園のように豊かな土地に変えられ、その民は繁栄を回復して、再び土地を追われることはない」と約束されている。……審判も復興も根本は神による。この確信と共に、アモスの預言は今日に伝えられたのである(『旧約聖書略解』木田、p.986)。「初めに、神は天と地を創造された」(創世記1:1)という創造論的信仰と「土地の<神による>回復」という終末論的信仰とは事柄の表裏を表していと理解されます。

「チェリノブイリの土地」「フクシマの土地」(核廃棄物の最終処分土地を見つけるという思想は破綻してます)「パレスチナの土地」「沖縄の土地」「アイヌの土地」(搾取、略奪、占領、破壊の土地への現実認識から闘う人々への連帯を呼び覚まされます)。そこに生きるものは、いつの日にか、木が育ち、人が育つような土地への「回復と希望」を信じないでは生きられません。

4、「福音と世界」誌(10月号)は最近の「竹島、尖閣問題」を巡って「領土問題とキリスト者」の記事を載せています。その中の一文「土地は誰のものか」(月本昭男、立教大・旧約聖書学)は「神が生きる基礎として生き物に与えたと(キリスト者であれば)信じる大地や海をわれわれが分割して、各自の所有物としてよいものかどうか。」と述べています。アモス書の土地の回復を信じる信仰と共に読みました。

「今日の説教、聴き手のために」 2012/10/7

明治学院教会 (289)

(このプリントは毎週作っているものです)

牧師 岩井健作

「矛盾の彼方に」

ルカによる福音書 16章1節-13節

選句「主人は、この不正な管理人の抜け目ないやり方をほめた」(8)

1、ルカ福音書のみに記載している、やや不可解な「不正な管理人の譬え」は一体どのような生活層の人々によって伝承され語り伝えたのであろうか。ある金持ち。多分大土地所有者。その土地管理人が財産浪費を告げ口されたため、主人の負債者の借用証書を自分の権限で書き換えさせることにより、職を失ってから彼らに迎えられように計ったという物語である。1-8a節が原物語。油百バツス (2300リットル) 麦百コロス (23000 リットル) とあり、小作の負債としては多い。商人を含めたかなりの経済活動である。その証書の書き替えて恩義を売って自分の身を守ろうというのだから、この世の知恵の不屈な機転と利口さではあっぱれなものである。実社会の機知が「光の子」という心の世界への比喩となるのは、「不正」(不正でない富があるのだろうか) は自明の前提である) という点ではなくて「仲間への利口なやり方」の一点であると考えれば、譬えが少々奇異であっても異存はない。編集 (9 節) では、「友達を作る」ことが一層強調される。富は下手をすると人間の上下関係を増幅するが、たとえ「不正の富み」であっても機転による恩義が「永遠の住まい」という宗教的価値 (共同性) に類比される可能性を秘めているところが面白い。10 節では、「小さなもの (世俗) に忠実」なことは「大きなこと (永遠の命の問題) に忠実なこと」という諺的知恵に繋がられている。さらに 13 節にゆくと、「神と富とに (兼ね) 仕えることはできない」という別なイエス語録 (マタイ 6:24) が引用される。ここにはルカの教会の当時の「富についての信仰者の態度」が幾重にも反映されて編集されている。

2、ある聖書学者 T 氏の解釈は参考になる。1 節の「無駄使い」は自分のための着服ではなく「ばらまく、散らす」意味で、金持ち・大地主の財産増強よりも、負債者・小作人の負担に気持ちが動いていた。負債を出さざるを得ない者たちの状況に眼を向けている、という。ちょっと強引だが、なるほどと思われる点はある。「告げ口」は同僚の弱点を捕らえた、出世主義の表れであったかもしれない。この管理人は、身近な小作人や商人が自分を仲間にしてくれるどん底の人情を知っていた。だから、イエスの時代の抑圧された貧しい者たちの間では、「不正といわれようと貧者の味方だったこんな管理人もいたのですよ」と物語が伝承され語り伝えられた。昔話「猿蟹合戦」(童話木下順次「かにむかし」) が、猿に象徴される強者ではなく、蟹に味方する弱者によって語り伝えられたのに似ている。表面の立場がどうであれ、金持ちの側に心を傾けるのか、貧しい者の側に心を傾けるのか、世の矛盾に身を置きながらも、矛盾の彼方には弱者・貧者の味方イエスがいまし給うことを暗示している物語だから語り伝えられたのではないか。イエスとは誰かを暗示する譬えである。山本週五郎の作品に「季節のない街」という都会の人情を描いた短編集がある。作品「たんぼさん」は、彫り物師の老人であるが、みんなが頼りにしてる。ヤソの斉田先生さえ密かに知恵をかりるくらいであった。物語は彼の存在が長屋の救いだという点にある。矛盾多き世の中、そして人生だが、その彼方にいますイエスに引きつけられて生きたい。

選句「自分の家に帰りなさい。そして、身内の人に、主があなを憐れみ、あなにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」(19)

1、今日の箇所は「悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす」物語です。キリスト教が整えられ「キリスト論」「贖罪論」「終末論」などと教義にまとめられた中では全く出てこない「民間説話」に基づく古いお話です。ゲラサはガリラヤ湖から60Km内陸部、デカ(十の意味)ポリス(都市)地方の一つです。物語の主人公はレギオン(ローマの6000人軍団の名)という悪霊にとりつかれて狂暴になり、墓場にすむいわば「精神病患者・狂人」です。そしてイエスはその人を癒したという奇跡物語です。

「この人から出てゆけ」というイエスの言葉で、レギオンは近くの2000頭の豚に入って、豚は湖に入って溺れ死んだ、という何とも激しいお話です。人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言います。正気に戻った人はイエスと一緒にいきたいと願ったのに、「家に帰りなさい・・・(出来事を)ことごとく知らせなさい」といわれ、デカポリス地方にイエスの出来事を宣べ伝えた(ケリュセイン)というお話です。

2、マルコの年代から考えると、初期キリスト教はかなり整った「教え」を持っていました。けれど、それを知っていてマルコは、あえてこういうドロドロした説話を大事にして伝えています。逆に、このお話を、私たちは現代的にあまり「非神話化」

(現代的解釈)してしまわないで、このゲラサのイエス物語の持つ重みを感じ取る必要があるのではないか、と思います。

3、マルコを使った同じ物語のマタイ版(8:28-34)では、短くして、「ゲラサ」をもっと湖に近い「ガダラ」として「悪霊に取りつかれた人」を2人に行っている(律法の証人規定の2人に基づく)、また「帰還命令」を省いています。ルカ版(8:28-39)は、マルコをほぼ踏襲しますが、悪霊の行く先に「底無しの淵」を加えたり「デカポリス」を削除したりして、合理化を計っています。この物語では、ゲラサやデカポリスの固有さが大事で、それは「宣教」そのものの中身なのです。

4、我々は、皆イエスとの出会いの固有な場と時、そして物語を持っています。そこが大事なです。概念化、抽象化、教義化は福音の事柄の整理、思考の過程では必要でしょう。しかし、概念が「福音」ではないのです。ドロドロした経験談、私にしかない物語、つまり「主があなを憐れみ、あなにしてくださったこと」(19)を自覚して、イエスとの出会いの物語を語るそのものが大事なのです。

5、「私が洗礼を受けたのは、私の意思でなく、母の選択でした。神の愛を信じる母にとって、信仰は、この世の最高の宝でした。自分にとって最高のものを、母は私に伝えたのです。それが母として子に与えることのできるかけがえのない贈り物だったのです。私はこれからも悩み、もがきため息をつきながら生きてゆくでしょう。でも、私にはっきりわかっていることが一つあります。それは、母が私を結びつけた神から、決して離れないだろうということです」。遠藤周作の語りです。

- ① 今日、今日の聖書テキストには、駄目なペトロが登場します(8:33)。イエスの受難を理解せず、政治的解放者を夢見て、イエスを「いさめた」のでしょう。イエスはペトロを叱ります。マルコ福音書はイエスの受難物語で、鶏の泣く前にイエスを裏切るペトロも登場させます。でも、ペトロを「わたしについて来なさい」と弟子に招いたのはイエスです(1:17)。「招き」が先です。この順序は駄目な弟子たちであっても変わらないということを、洞察しておくことが、まずこの物語の読みどころです。
- ② 「群衆を弟子たちと共に呼び寄せて」(34)は、弟子も群衆も区別なく改めて呼ばれています。「神の招き」は開かれています。群衆はローマの植民地ユダヤで呻吟している者たちです。彼らが「招かれ」ます。招きに応じて生きるものが聖書の示す基本的人間像です。そこに自分のアイデンティティー(自分たること、自己同一性、本来の自分、過去・現在・将来への一貫性)を見ます。「不安の病理」(岩波新書)で笠原嘉氏は精神科医の努力で精神疾患の病者を直すには限界があると言いながら「それでも病人は元気になる。そして元気になれば私を離れてどこかへ行ってしまう」といっています。その人を活かす不思議な「招き」の関係の中で生きているとしか言い様がありません。これが人を活かす縦軸です。その人のアイデンティティーを基本的に支えるのは、「神関係」「神の招き」なのです。
- ③ イエスは「われに従え」という縦軸の「招きと応答」を自覚的に捉えるには横軸で二つのことを命じます。①「自分を捨て」は固定化、硬直化する自分を絶えず柔軟に修正し、相対化して、自己完結に陥らないということです。これは「応答」の一つの中味です。宗教的な言葉でいえば「懺悔」「悔い改め」です。人間学的に言えば「反省」「想起(エリンネルンク、ドイツのヴァイツゼッカーの言葉)」「歴史認識」とでもいう事柄です。
- ④ もう一つは②「自分の十字架を背負って」です。これは状況を生きるということです。状況の捨象(ある面だけで把握する、切り捨てる)は独善的になって、もっとも苦しんでいる隣人を見失います。芥川の短編小説「蜘蛛の糸」ではありませんが、自分だけ救われようとする、自分の命を失います(35)。状況を背負うことは、「わたしのため、福音のために命を失うものは、それを救う」(35)という逆説を生きることです。患者が元気になれば医師を忘れてどこかへ行ってしまうというのは逆説です。精神科医は孤独であっても、患者に対して熱心に(十字架を背負って)関わるのが今日の役割だと先の医師は言っています。
- ⑤ この縦軸と横軸を生き切った方として、聖書はイエス(キリスト)を私たちに示します。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」(フィリピ3:6-8)。イエスは倣う生を自分の歩みとしたいと存じます。

「今日の説教、聴き手のために」 2012/11/1

明治学院教会 (292)

(このプリントは毎週作っているものです)

牧師 岩井健作

「覚えられているということ」

詩編 106 編 1 節 - 5 節

選句「わたしを御心に留めてください」(4)

- 1、今日は、永眠者記念礼拝です。名簿の方だけでなく、それぞれに家族や親しい者たちを覚えて礼拝を守りたいと存じます。私事になりますが、私の父も亡くなって20年です。最後に「僕の生涯は感謝であった」という言葉を残して召されました。感謝で生涯を締めくくることがキリスト者としては自然なことですが、そこには長い聖書の信仰の歴史が根底にあることを感じました。
- 2、先程お読した旧約聖書の詩編106編は、内容からいうと、イスラエル民族の神への反逆の歴史を思い起こしている部分が長いのですが、その暗い歴史を挟み前後に「ハレルヤ」と神への讃美が歌われています。「旧約では歴史は第一に神の歴史であるから、讃美がわくとして出てくるのは当然である。」(関根正雄)と述べています。神の歴史の中に自分が覚えられるというのは、旧約聖書の人々の大きな願いでした。そのために「わたしに御心を留めてください」(4節)と祈っています。覚えられているという経験は私どもでも喜びですが、旧約聖書の人々には人生の存在意義そのものでした。
- 3、私は「記念会」というと忘れ難い経験があります。もう40年ほど前です。当時責任を持っていた教会で、一人のご婦人から30数年前失ったご長女の記念会を頼まれました。長い長い物語を一通りお聴きしました。自分は女学校の時、封建的な家の制度で、魂が窒息しそうになった時、親に隠れて密かに、街の教会で洗礼を受けた。結婚も養子をとらされて家を継いだ。夫はすぐれた学校の教師で有力な人であった。若い夫婦は、僻地校に責任者として赴任し、そこで長女が生まれ3歳で疫病で亡くなった。骨は実家のお寺に納めた。しかし、自分にとっては、その最初の子が、神の御許に召されていて、自分を神様に繋ぎ留めている事を感じ、その後の年月を生き抜き、やがて教会のある街に住むことが出来、今日に至っている。いまでは夫も自分の信仰を認めてくれて、亡き子の記念会に賛成してくれた。その子は、「一粒の麦として」神と自分とを繋ぎとめていた存在であった。記念会でその事に感謝を挙げたいとのことでした。恵みに満ちた静かな記念会でした。後日談はさらに神の働きのお恵みの物語となります。
- 4、記念会は、わたしたちが、亡くなった方を覚えて何かをするという行事の日と思い勝ちですが、そうではありません。亡くなられた方が生前「信仰に生きたかどうか」ではなくて、その方の生涯をとおして「神が自分を覚えてくださること」を悟る日です。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、ただ一粒のままである。しかし、死んだなら豊かに実を結ぶようになる」という聖書の言葉を覚える日であり、また、亡くなった方を通して「私に御心を留めてください」と祈る日でもあります。

「今日の説教、聴き手のために」

2012/11/11

明治学院教会 (293)

(このプリントは毎週作っているものです)

牧師 岩井健作

「無くてならぬもの」

詩編 127 編 1 節 - 5 節

選句「主はその愛するものに眠っている時にも、無くてならぬものを与えられるからである」

(2 節口語訳)

- 1、今日お読みした詩編 127 編は教会堂の献堂式などによく読まれる詩編である。確かに教会堂の建築は人の業であるけれども、それは神が建てるという根本が失われたら空しいものだ。ここの「家」はエルサレムの神殿を指すと昔から理解されてきた。しかし詩編の研究者の多くは「家」を建物と理解するよりも、家庭と理解している。日本では旧約学者、浅野順一牧師は「家庭の幸福は、その家庭が文化的に完備せるためでもなく、生計を支うべく豊富な収入があるためでもない。・・・唯一のものを欠くならばその幸福は過ぎゆく影にすぎない」(『詩編』P. 398)と述べ、詩編 103 (人のはかなさを草に例える) やルカ 12:20 (金持ちの安堵にたいして今夜貴方の靈魂はとられるとの警告) を引用している。浅野牧師に育てられた者たちは、家庭についてそのような信仰の筋を持っていた(先般、一周年記念会を迎えた教会建築家であった拙兄も浅野牧師に育てられた)。
- 2、『信仰 20 年基督者列伝』(1923 大正 10 年、警醒社) という珍しい本の寄贈をかつて受けた。明治 20 年代に入信あるいは伝道者になった 800 余名の素描が記されている。そこで二つのことを思った。第一は、明治期の家父長制と血縁の強い社会で人格の独立と自主が新しい価値観・倫理観として生きられていること。第二は信仰の継承ということ。前者は個々人への神の招きと応答である、後者は何らかの意味で親子、血縁のよつなぎりである。例えば 2 代、3 代目のクリスチャンが存在する。2 代目は親の影響はあるが、しかし信仰は各自の決断によっている筈である。血縁が強くなると「檀家クリスチャン」というものになって、決断とか応答の面が弱くなる。岩村信二牧師は『血と契約』という書物で、血縁共同体は下部構造で契約(信仰)共同体は上部構造だ、とその関係を社会学的に分析をしている。だとすると「いざ」という時、下部が顔を出して、上部は観念的な役割しか果たさないことになる。つまり、平たくいえば、信仰は実質的な社会生活に力を持たないことになる。関田寛雄牧師は、それを批判して、人間の直接性(地縁、血縁、利益共同体、権力共同体)は、終末的(最後には)止揚(破壊してさらに高められる)されるべきものと捉える。この「血から契約へと」両者の関係を「止揚(アウフヘーベン・哲学用語)」として生きることが、信仰生活の日々の自覚、あるいは闘いの問題である。
- 3、「神は眠っている時にも(無自覚なときにも)、無くてならぬもの(契約の關係)を与えられるからである」(口語訳) とは慰め深い言葉である。「げに彼は愛する者に眠りの間によきものを給う」(関根訳)。「契約の關係」、「人格關係」、広くは「人間を対等の人間として尊重する關係」は「よきもの」である。これは「主が家を建てる」ことの内実的意味である。われわれは人間の直接性に埋没していることが多い。知らない間に、権力や暴力(武力)、地縁血縁への寄り掛かりに生きている。その無自覚を超えて、神は働き給う。だからこの罪多きものも生き、働くのだ。

「幼子の復権」 マタイ 11 章 25 節－30 節。

選句 「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のようなものにお示しになりました。」 マタイ 11 章 25 節

- 1、「“神”の知恵が幼な子に示される」という考えは古くから聖書にあります。「わたしは・・・驚くべき業を重ねて、この民を驚かす、賢者の知恵は滅び、聡明な者の分別は隠される(イザヤ 29:14,))」や「主の定めは真実で無知な人に知恵をあたえる(詩編 19:8)」などはそれに当たります。今日お読みした 25 節は、イエスが祈りとしてその考えを表現している箇所です。この箇所について研究者は、アラム語の語調が強く残っているのを、真性のイエスの言葉だと言っています。イエスは他の箇所でも「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(マルコ 10:15)と述べています。またパウロの言葉にもある「神は・・・世の無力な者を選び」(コリント 11:18-28 特に 27、イザヤ 29:14 を引用している。)と同じ思想を語っています。今日の箇所の伝承を残した初期の教会(Qグループ)は強いものが幅を利かす世俗の波風の中で、イエスに従う自分達の小さな弱いグループを「幼子」になぞらえて逆説的な励ましを自らに言い聞かせていると思われます。
- 2、子どもを逆説的に大人を凌駕する存在として描いている文学の中では、聖書と同じテーマが喚起されています。例えば、サン＝テグジュペリ『星の王子さま』。王子さまは、自分の住んでいた星とバラの花に別れを告げて旅に出ます。新しい出会いを通して友情と愛することの本当の意味を知るための旅です。もろくはない王子さまの存在は、この世の社会法則の圧倒的な力で生きている大人の分別を批判しているとも思えます。ミヒヤエル・エンデの『モモ』。「時間どろぼうと、ぬすまれた時間をとりかえてくれた女の子の物語」が副題で、幻想的な童話形式のお話です。巨大な現代都市に暗躍して個々人から固有な時間を奪う「時間貯蓄銀行」の「灰色の紳士」と闘って、モモは人間の根源的時間感覚を復権させます。モモは異次元からの救世主をすら暗示しています。人の話をよく聴いて他者の立場に自分を置く能力を持っています(私にはイエスを暗示しているようでした)。このお話には「星の時間」が出てきます。「星の時間とは、まったく一回きりしか起こりえないようなやり方で、たがいに働くような時間のことだ」と時間を司る人、マイスター・ホラは語ります。「この宮の森の木下で子どもらと遊ぶ春日は暮れずともよし」という良寛の心にも通じます。「出会い(エンカウンター)」とか「邂逅」という言葉には人知を超えた出来事への思いが込められていますが、子どもの世界には奇跡のような「神との出会い」の暗示があります。
- 3、さて、この箇所は「イエスの祈り」です。「天地の主なる父」は、元来はイエスの「アッパ(“お父さん”の幼児語)」という率直な祈りの姿がありましたが、伝承過程で儀式的な言葉に改変された、といわれます。幼子は「ネーピオス(幼児、子供、無学な者、未熟者、小さい者、新約に 11 回)」で、“神”に頼る以外に生きる寄るべを持たない、力なき者です。各自の人生にもそんな場面や経験がきっとあるでしょう。そんな思いを大切にして、幼子のように祈る「祈り」を大事にして、内なる「幼子の復権」を心に宿して行きたいと存じます。

「今日の説教、聴き手のために」 2012/12/2 明治学院教会 (295)
(このプリントは毎週作っているものです) 牧師 岩井健作

「主と共なる宴」 ルカ 5章 27節－32節。

選句 「そして自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が
大勢いて、一緒に席に着いていた。」(29 節)

- 1、ルカ福音書の「レビを弟子にする」という物語から学ぶ。27節。「出て行く」イエスと「座っている」レビの対比が鮮やかである。レビとは誰か。ローマ帝国下の属領地の支配者ヘロデの配下の徴税人である。権力を傘に着て民衆を苛酷に搾取し、私腹を肥やしてさえいた下級官吏である。同胞の憎悪の目は、収税人を軽蔑する構造と共に彼の上に重くのし掛かっていた。当時の宗教家パリサイ人たちがこれを「罪人」と断じた(30)。座っている姿には、被差別者の影と憂いが漂う。彼の内面の孤独はいかばかりであったか。「座っている」とは魂の身動き出来ない、暗く重い姿である。他方ルカのイエスは旅の途上にある。『旅空に歩むイエス』(三好迪著 講談社)はルカの解説書の書名である。旅は何处へ。「十字架」の受難の地エルサレムに向かう。「十字架」へと旅するイエスと虚ろなレビとが出会う。
- 2、イエスは彼に「従ってきなさい」と声をかける。マルコは「立ち上がって」とだけあるのに、ルカは「何もかも捨てて立上がり」と「捨てた」ことを強調する文言を挿入する。ルカは「富・財産・持ち物」へのこだわりがある。「マルコ」はこだわるには何も持たない民衆が主役であったのであろうか。しかし主な関心をそこおく必要はない。「立ち上がり、イエスに従った」という句にこの物語の主題がある。レビの内面的経過は一切記されていない。何故従ったのか。躊躇はなかったのか。レビの気持ちにはいろいろ語られるべきことは沢山あったであろう。迷い、不決断、いや決断、感動。しかし、それらを一切包み込んで「招き」と「応答」の出来事だけが記されている。「召命記事」とはそのようなものである。魂の閉塞にあった人間が「十字架」への道行きに同行する。驚くべき出来事である。「死んでいたのに生き返り」(ルカ 15:24, ロマ 11:15)とはルカの通奏低音である。我々もレビに投影されている、招きと応答の構造を自らのものと自覚して生きてゆきたい。
- 3、その後、レビは食事の席を設ける。(ルカは食事に積極的意味を持たせる記事をたくさん書いている。それは食事を神と人、人と人との交わりの回復のしるしとして認識しているからであろう)。マルコが「食事」とした所を、ルカは「宴会」と書き替える。恐らく、レビによって、ほかの徴税人や疎外され差別されていた人達が招かれたのであろう。己の力で招いた宴会ではない。己を捨て、己をむなしくして奉仕した食事であった。「主と共なる」の意味がここにある。レビは独りが救われたのではない。神からの和解(救い)を人々との交わりに具体化した。己を捨ててイエスに従う。この一事が宴(食事)の質を、人間的、自己誇示的なものではなく、「主と共なる宴」に変えたのである。テーブルには見えないけれど、そこにイエスの席を自覚する時、例え独りの食事であっても、それは開かれた「宴」となる。今、世界の飽食と飢えはテーブルを同じくしてはいない。だが、多くの開かれた宴への働き、助け合いの働き、現代の「炊き出し」の文化が、主が共にいます宴の象徴として行われていることは恵みである。今年もクリスマスの季節、支援を求める働きは洪水のように届いている。祈りを持って受け止めたいと思う。身近な日本基督教団神奈川教区寿地区委員会が運営している「炊き出し」の働きも祈りを持って覚えて行きたい。

選句 「どうか天を裂いて降ってください。御前に山々が揺れ動くように。」(19b)

- 1、私たちは、毎日曜日の礼拝で「主の祈り」を祈ります。これには深い意味があります。今の整った形は初代教会が整えたものです。イエス自身の祈は、もっと短く、ほとんど叫びに近いものであったと言われています。例えば「み国が来ますように」という祈りは、現実の世界の、不条理、不義の暗さの中での神への叫びでした。
- 2、叫びに近い祈りの伝統は、旧約聖書にあります。今日のイザヤ書63章19bの言葉はその例です。「どうか天を裂いて降ってください。御前の山々が揺れ動くように」。詩編には「主よ、天を傾けて降り、山々に触れて、これに煙りを上げさせてください。」(144:5)とあります。この祈りは神への切なる求めです。「あなたを待つ者に計らってくださる方は、神よ、あなたのほかにはありません」(65:3)。こんな激しい祈りを捧げた時代とはどんな時代でしょうか。これには前史があります。
- 3、今から2500年ほど前、イスラエル民族のバビロニア捕囚期の末期です。バビロニアが滅び、ペルシャ帝国が勃興し、解放と祖国復帰の時が到来します。その時、民族を指導したのが「第二イザヤ」(イザヤ40-55)と呼ばれている匿名の予言者です。復帰に伴って政治的独立運動が起きます。予言者は、それを支え、セシルバザルという人物を立てて、この人をイスラエルを救うメシヤ的王として密かに即位させます。このことはペルシャ帝国には到底承服し難いことで、彼は捕らえられ、責任を取られ、彼は苦しめられます。しえたげられただけでも、遂に口を開かず、ほふり場に引かれる小羊のように黙して、人々に代わって罪を負い、遂に不法にも殺されます。帰還の民は、彼の犠牲によって、破滅を免れ、エルサレム周辺に定着します。民衆の心に刻まれたこの指導者の姿は名を秘されたまま「苦難の僕の歌」(イザヤ49以下)となって語り継がれます。民衆自身には彼を死に追いやった負い目が残りました。
- 4、それから少し後の時代です。老予言者ハガイが立てたユダの総督ゼルバベルがペルシャの官憲によって圧殺されます。民族は失意と挫折に陥ります。彼らは語り継がれてきた「苦難の僕の歌」を思い起こして、激しく神に救いを求める祈りを捧げます。これが、イザヤ書63章19bの祈りです。「第三イザヤ」(イザヤ56-66)と言われる部分に残されています。
- 5、代々の教会は、この箇所を、待降節のテキストとして、読み続けて来ました。そして時代の巨大な闇を自覚してきました。今の時も、途方なく濃く深く広い闇が、神の創造による人間の尊厳、命、繋がり、足蹴りにし、脅かし、抹殺して行きます。我々はそれを自覚し、激しく祈らざるを得ません。「主よ、御国を来らせ給え」と。「君はこんな苦しい時が来たことを単に嘆き不平を言っただけはいけません。キリストの民であり。神の民である君に言う。君は自分を捧げなければならぬ。そして勝利を思わねばならぬ。困難な時にこそ、正しいもの、永遠なるものが準備されているのだということを思わねばならぬ。」(ブルームノット)。闇に心を震わせる日々、それゆえにこそ主を待ち望みたい。激しい祈りを宿しながら。

「ふるまいの人から委ねる人に」 ガラテヤ 1:11-17

選句 「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」 (15)

- 1、キリスト教は「出会い」の宗教だと言われます。これは「まとめられた使信」(信条、信仰告白、教義、教理)が中心の宗教ではないということです。地上の宗教ですから、儀礼、教義、組織を必要最小限度維持しています。しかし、それが肥大化し、固定化して弊害を持つ時、いつも改革が起こされてきました。16世紀の「宗教改革」然り、20世紀のラテン・アメリカの「解放の神学」然り。「出会い」と「教義」の関係を言えば、「山」と「地図」の関係でしょう。山は登る度に新たな体験です。地図は絶えず書き直されても手引きにすぎません。「なぜ山に登のか・・・山がそこに在るから」と先人がいった名言があります。これを「山との出会いの関係」だとすると、「地図」は「山への理解」です。これを「信仰」の世界になぞらえますと、「出会い」は「神との関係」、その投影としての「人との関係」です。それを「神関係」と表現しますと、もう一方は「神への理解」その投影としての「人への理解」です。今日のテキスト、パウロにそくして考えると次のようになります。

- 2、パウロが「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」(15)という時、これはパウロの「神関係」ですが、これは終始変わっていないのです。ところが「神への理解」の方は、パウロは大きく変わっていくのです。彼は過去を振り返って自分が「ふるまい」(13)の人であったと述べます。二つの「ふるまい」、即ち「神の教会を迫害」した者、「先祖からの伝承(律法)を守る」に人一倍熱心であった者、と記されています。ところがこの「ふるまい」が変わるのです。「律法による神理解」に基づいていたものが180度変わります。「イエス・キリストの啓示によって」(12)変えられたというのです。パウロはこれは「人間から受けとったわけでもなく、教わったわけでもないのだ」(12 田川訳)と強調しています。「イエス・キリストの啓示」とは彼にとっては具体的にはダマスコ途上の体験(言行録 9:1f, 22:4f, 26:9)を指していますが、内面的には、律法による「ふるまい」の生活(律法によって救いを求めた自己実現の生活)に行き詰まったことと考えられます。律法の行いをよしとする神は、行えない者には裁きをもって臨む「強い」神でした。彼は行き詰まって、限り無く「弱い」自分に気が付いたのです。その「強い神」に耐えられなくなった時、十字架の苦難と死をもって自らを表す、限り無く「弱い神」を、「啓示」(神の働き)によって示されたのです。それは気が付いてみればイエスの十字架の出来事によって理解された神との関係でありました。その神は、弱いパウロを限りなく包み込む、恩寵の神であったことに気が付きます。「神関係」は変わらないが「神理解」が「律法の神」(強い神)から「十字架の神」(弱い神)に変わったのです。

- 3、パウロは、以後「ふるまいの人」から、神の恩寵の関係にすべてを「委ねる人」に変えられました。わたしたちの生き方を顧みると、絶えず、「恰好を」をつけて生きています。「恰好をつける」時には、自分本位、自己実現の生き方が前面に出ています。そこを絶えずイエスの十字架の死にあづかって己に死ぬことが大事なのです。「主にありてぞ、われ死なばや、主にある死こそは、いのちなれば」(讃美歌54年版361・2節)。この「死にあずかる」(ロマ6:4)しるしが洗礼の深い意味です。「出会い」を「クロス・エンカウンター」(造語)と表現した人があります。クロス(十字架)を媒介とした「出あい」を大切にしたいといひます。

「飼い葉桶のイエス」

ルカ 2: 1-7

選句 「初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶の中にねかせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」 (7)

1、「飼い葉桶のイエス」はクリスマス物語の象徴的な場面である。しかし、その背景には二つの文脈がある。まず、ルカ福音書の文脈。「ルカ福音書」の一つの特徴は、「貧富の格差」の問題に触れて、金持ちを戒め、貧しい者に救いを告げ知らせている。「貧しい人々は、幸いだ」(6:20)、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」(18:25)などは一例である。イエスの誕生物語で「羊飼いの礼拝」が出てくるのはルカのみであるが、羊飼いが担う意味は何か。「羊飼いは・・身分と仕事のゆえに罪人のカテゴリーに入れられ差別をされていました。」(太田道子『ことばと光②』p.137, 聖書学者)。「罪人」は律法遵守の視点からの断罪であるが、羊飼いが、託された羊を守ために血にかかわる争いをするとか、安息日に働くとか、は律法違反であった。同時に彼らは、重税、搾取のゆえに、二極化された貧富格差の底辺の貧しさに置かれていた。その羊飼いに「救い主」の誕生が最初に告知される(2:10f)とは、救いに関しては、貧富逆転の逆説(金持ちとラザロの物語 16:19f)を暗示する物語である。イエスは「宿屋(言語は「カタリユマタ」居間を意味する語・団欒の象徴)」という社会通念としてのコミュニケーションの外に、誕生の場をもつて。「飼い葉桶」はそれを含意している。疎外され、差別され、抑圧され、貧しくされて生きざるを得ない者たちを象徴している。そして、そのような人間を疎外する力、宗教権力との闘いとしてイエスの生涯・振る舞いは描かれてゆく。

2、他方、聖書全体からみると、羊飼いは「主(ヤハウェ)はわが牧者なり」(詩編 23:1)、「わたしは良い羊飼い」(ヨハネ 10:11)とあるように、神、イエスそのもののイメージである。「牧師」「牧会」などと用いられるように、人間へのケア、魂の養いの働きの根源を象徴している。「飼い葉桶」は家畜(牛、馬、羊)の餌箱であるが、養い育てるという命の働きのイメージを持つ。「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」(マルコ 2:17)。十字架上に生涯を終えて、病める者への癒し、慰め、和解、を成就したイエスのイメージそのものである。

3、「闘いと和解」「対決と対話」。この二つは矛盾するようでイエスに於いては一つの出来事である。現代の最難問パレスチナ問題でこのテーマに取り組んでいる映画『沈黙を破る』土井敏邦監督(キリスト教婦人矯風会上映)に心を打たれた。イスラエルのジェニン難民キャンプの破壊と殺戮を描く一方で、イスラエルの退役軍人・元将校たちが「沈黙を破る」という NGO 運動を起こし周囲の敵意に身を曝して、戦場での罪を告白し、戦争犯罪の写真展を行う。そしてパレスチナ側との和解の働きを模索する。また、ハマスのロケット攻撃で娘を失ったイスラエルの親が報復の憎しみを増すのではなくパレスチナ人と対話をしようと積極的に和解と平和の糸口を探ってゆく場面がある。国家間の泥沼の悲慘に市民が微かな光を灯している。自国の戦争勢力と闘い、遥かなる国境を越えた「人間の顔」を模索する者たちに希望を抱く。「飼い葉桶のイエス」が象徴であるような生き方に導かれ、暗い闇の世に光を灯して行きたい。